
東方幻想入り

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想入り

【Nコード】

N1256Y

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

私、星空澪は不思議な世界に迷い込んだ。不思議な子、変な子、大人をバカにすることしかできない子供。そう言われ続けてきた私が迷い込んだのは、優しい人がたくさんいる、私以上に変な、独特な世界だった。その世界のことを、人は幻想郷と、呼んでいた。

・この作品は二次創作です。原作との相違点、キャラクターの違い、設定の違いが多々あります。ご了承ください。

迷い込んだ私（前書き）

迷い込んだ私

自己紹介から始めるべきだろうか。私の名前はほしぞらみお星空漣。性別女性。生まれてから十年、楽しい事よりも辛い事の方が多かった。母とお父さんが六歳の時に離婚して、それからすぐに母が自殺したせいで、私は一人きりになってしまった。いや、ふたりがいたころも、一人きりだったようなものか。

今はお父さんが養ってはくれているんだけど、お金を送ってくるだけで、他に父親らしいことはしてくれない。

お父さんは私のことを愛してくれているはずんだけど、罪にならないギリギリまで私を放っておくみたい。怒ってくれるのを期待して学校を一ヶ月行かなかったこともあったけど、先生に怒られただけだった。

私は運も悪いのか、はたまた巡り合わせが悪いのか、学校の帰り道に攫われて死にかけるような目にも何度も遭った。何をしようとも父親が何も言ってくれない、というのがどこからか伝わって、私は犯罪者の格好の的になった。それでも五体満足で生きている私は、ある意味で運がいいんだろうけど。

こんな人生を歩んできた私は、いつしかどんなことにも動じない心を手に入れていた。もし今心臓の上にナイフが突き刺さっても、普段と変わらず状況を分析できる自信がある。大人はそれを心が死んだと表現したがるけど、私はそう思わない。冷静であるということとは、生き残ることに繋がる。私は短い人生の中、得られた経験からそう悟っていた。

自分の自己分析が普通の子供達よりも明晰なものには理由がある。自分のことを冷静に、客観的に見つめられるようになったとき、自身の中の語彙の少なさに非常に困った。そのことに対して対策を講じたからに他ならない。

一人きりの私は、他の子供と違い、家族ではなく他人に頼ってし

か生きていけない。

冷静になったせいで感情を表情や行動で表すことに関して極端なまでに不得手になってしまった私が、自分のことを理解してもらおうためにどうすればよいのか。私が出した結論は、話すことだった。

痛い、苦しい、楽しい、嬉しい、気持ち悪い、気持ちいい、と言ったものを言葉で表現しなければならないと、私は考えた。

そのために必要な言葉を、私は家にいる間必死で覚えた。辞書に書いてある言葉の八割を覚えても、大人向けに書かれた本を読むのには苦勞した。だが、苦勞してでも知識を頭に詰め込んだおかげで、少しは理知的に物事をかんがえられるようになったと思っっている。ただ、その弊害もあった。知りたくもないような醜悪な知識も、同時に頭に入ってきたのだ。

私の目の前に広がっている深い深い森。これも、私に恐怖をもたらした知識だった。本曰く、一度迷うと二度と元の場所に帰れない。私はそのど真ん中……どこが真ん中なのかはわからないが、とにかく三百六十度、木と草の緑と幹と地面の茶色で埋まっている。地面に目をむけると、土と草に混じり、色とりどりのキノコがいくつか生えていて、一層不気味に私は感じた。

今度は自分の姿を見る。私は白い素足を晒し、水玉模様の長そで長ズボンのパジャマに身を包んでいた。つまり私は、眠る前の格好のまま、ここにいるというわけだ。私は立ち上がると、何も考えずに前に進んだ。

どうせ方角を知る方法など知らないのだ。ならば、ひたすらに真っ直ぐに進めばいつかはどこかに出るだろう。出なければ、野垂れ死に。いつものことだ。何かに成功しなければ、死ぬ。

死ぬのか、死なないのか。わからないことが少しだけ、怖い。枝をくぐり、草をかきわけ進みながら、そんなことを考える。そして同時に、恐怖を感じながらも冷静に考える自分を奇妙に思う。

「……………」

足の裏に痛みを感じ、足をあげてそこを見る。鋭い石を踏んだ

ようで、踵の部分の一部が裂け、血が流れていた。

このまま歩き続けたら化膿するだろうか。もしそうになったら、足が使い物にならなくなるのだろうか。……どちらにせよ、この痛みではもう歩けない。そう判断した私は、その場に座り込んだ。じめりとした感覚がお尻に伝わる。今もう一度立ち上がれば、お尻回りが土色に汚れていることだろう。

注意深く周りを見回しながら、重要なことを考える。

私はなぜここにいるのか。家のベッドで横になり、目を閉じたのは覚えている。しかし、私はここで目覚めた。

考えられるエピソードは、犯罪者に攫われたが必死な思いで逃げ出し、その途中で力尽き眠りについた、というもの。もしそうなら、私の眠る前の記憶があやふやなのが気になる。

……汚されたのだろうか。

少し不安になって、服やその他色々なことを調べた。服には脱がされた跡はなく、肌にも汚れはなかった。汚されたわけではないのがわかって、息をついた。

ならばなぜ私はここにいるのだろうか。問いが巡りだす。わからないことばかりで、少しだけ不安になる。一度は否定したはずの可能性が、再び頭をもたげてくる。

「あなた、こんなところで何してるの？ 死にたいのかしら」
そんな時、女の人が茂みの奥から出てきた。白を基調とした服装に身を包んだ、宙に浮かぶ人形を従えた摩訶不思議な人だった。

「助けてください。迷い込んでしまいました。踵を切つてしまい、動けません。肩を貸して頂けますか？」

私の丁寧語が間違っていたのだろうか、目の前の女性は驚いたような顔をした。

「……あなた、人間？」

「はい。私は星空漣と申します。助けていただけますか？」

女性は気を取り直すように咳払いをすると、手を翻した。すると彼女の周りで浮いている人形達が私の脇のしたと膝の裏に周り、

私の体を持ち上げた。急に体が浮く感覚に全身が逆毛立ったが、何も言わない。

「……私はアリスよ。変な子、あなた」

「そうですか。お世話になります」

私は頭だけ下げてお礼を言った。アリスは私を一瞥すると、踵を返して森の中を歩き始めた。彼女の足取りは淀みなく、まるでこの森が自分の庭であるかのような自然な歩みであった。

「あなた、ここがどこかわかってる？」

「わかりません。ここがどこか教えて頂けますか？」

「敬語やめて」

思ったりよりも鋭く、そんなことを言われた。多少面食らったが、初めて言われたことでもないのと言う通りにする。

「わかった。ここはどこ？」

「ここは幻想郷。知ってた？」

「……知らない」

幻想郷。知りたいような知りたくないような、そんな名前だった。

優しい人に出会った私

魑魅魍魎の拠り所。忘れ去られたモノの最後の居場所。幽霊妖怪鬼悪魔。人に近い人ならぬモノが跳梁跋扈する現世とは異なる違う世界。

「どうやら私は、そんな場所に迷い込んだようだった。」

「つまり私は忘れ去られた、と」

私は結論をアリスに言った。

母に置いていかれ、父とも長い間会っていない上、ついに友人や先生にも忘れられてしまったのだろう。一か月休んだ後、さらに二ヶ月も学校にいかなければ、そうなるのは当たり前か。

「さあ。外の世界から来た人間は、必ずしも忘れられたから来るわけじゃないから」

「そう」

だからと言って、可能性が消えたわけじゃない。私が知ってる人全てに忘れられてしまった可能性は、未だにあるのだ。

「……忘れられてしまったのかもしれないのに、怖くないの？」

「怖い」

素直に答える。見知らぬ土地で一人迷い込んだせいか、得体の知れない恐怖が私の心の大半を占めていた。いや、それ以前の問題だ。お父さんも友人も、先生も。皆が皆、私というものを忘れてしまう。そんなのは嫌だった。真実は、どうなのだろう。

「とか言う割に、冷静みただけ？」

「怖いのは事実だけど、それを態度に出すかどうかは別だと思う」
「的確な表現ね」

褒めてもらえたはずなのに。心の奥が痛んだ。それは、振り向いたアリスの顔が、私に対する哀れみに満ちていたからだろうか。なぜ、この美しい女性は私を哀れむのだろう。外から来る、というところが珍しく、そして可哀想なことなのか？ それとも、ここに来る

理由は複数あるようなことを言っていたが、それが優しい嘘なのだろうか。

もしそうなら、真実なんて知らない方がいいのだろう。

「あなた、なんでそんな話し方なの？」

「なんで、とは？」

そんな、とはどんな話し方なのだろう。よほど癪に障る言葉遣いなのだろうか。それとも、ここではタブーになっているような言葉を知らず知らずのうちに使っているのだろうか。

「その、言葉から感情を抜き取ったみたいに変なやつ。理由あるの？」

「理由……？」

言われて、少し悩む。

なぜ、このような話し方にしたのだったか。その記憶はかなり曖昧だった。元の話し方が、大人達を怒らせるからだったのか、他人に頼るに不利な口調だったからか。よく覚えていない。

「なぜかは、覚えてない」

「じゃあ、特に理由はないってことね。その話し方もやめたら？」

もっと子供らしい話し方した方がかわいいよ」

「……」

親切心から、そんなことを言ってくれているのだろうか。嬉しくもある反面、悲しくもある。

「子供らしさなんて、要らない」

「……そう」

私に必要なのは物事を考えることのできる頭と、知識。体なんて鍛えてもたかがしれているが、頭なら、心なら。それならば、何かあった時死なずにすむかもしれない。読む本はつまらなかつたし、楽しくなかつた。それでも死にたくない一心で頑張った。

頭の中が今のようになる頃には、私の中の子供らしさ……可愛いものが好きだとか、フリフリとした服を好むとか、人形がお気に入りだとか、そういったことは私の中から排除されていた。……いつ

か消えるものなのだ、惜しくはない。そう思っているはずなのだ。

「……………何かあったの？」

私は思わず首を傾げた。今まで私を哀れんでいた瞳は、今度は心配そうに私を見つめていた。今までなら、大人達は皆、私のことなど知らない振りをしたのに。

「な、何かつて、何？」

「……………怖い目に遭った？」

私は呆気に取られた。なぜだろう。なぜこの人は私にこうも気をかけるのだろう。

「……………あ、遭ったことなんて、ないよ」

「そう。辛いこと聞いちゃったわね」

それきり、アリスは黙った。怒らせただろうか。嘘をついたのが、わかってしまったのだろうか。

「私の家、空き部屋結構あるから、しばらく泊まっていていいわよ」

「ありがとうございます」

そうお礼をいいながらも、私は戸惑っていた。なぜ、この人は私を泊めてもいいなんて言うのだろうか。家族は何も言わないのだろうか。そもそも、なぜ警戒しないのだろうか。私が悪人だとは思わないのだろうか。

「……………それから、元いたところに帰るまでくらいなら、食事くらいは用意してあげる」

「……………同情？」

本で読んだことがある。あまりに可哀想な人を見てしまうと人はつい優しくしてしまうのだと。私は、可哀想な人なのだろうか。

「……………嫌だったかしら」

「ううん。すごく嬉しい」

嬉しいのは嬉しいのだが、反応に困る。こういう時、どんな反応をすれば喜んでもらえるだろう。……………しばらく考えて、お礼を言う以外に思いつかなかった。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで。帰るまでだから、きつとすぐでしょ」

そう言っただけでアリスが笑うのと同時、開けた場所に出た。相変わらず木と土とが視界のほとんど占めているが、広間のようなこの場所には木製の家があった。小さい家だが、ただ広い私の家とは違って人の温もりがありそうな、優しい家だった。

「あれ、私の家だから」

「お邪魔します」

アリスは私のお礼に苦笑すると、家まで行って玄関の扉を開けた。内装はさながらログハウスのようで、台所からテーブル、食器棚から食器にいたるまで全て木製で、テーブルの上にはおしゃれなクロスが掛けてあった。壁の上のほうに備え付けられた棚には、アリスの周りに漂っているような人形たちが所狭しと並べられている。

私はアリスの人形に運ばれ、テーブルの近くにあったソファの上に座らされた。

「ここで待っててね」

アリスはそう言うと、玄関とは違う方の扉を開けて、どこかへ行った。人形達が私の前でふわふわと浮き、何やら踊りを踊っている。その様子はなぜか楽しそうで、微笑ましかった。

「楽しんでくれてるみたいね」

「うん。アリスが動かしてるの？」

頷いたアリスの手には、木製の籠があった。救急箱だと思う。彼女は私のそばまで来ると、怪我をした足を取った。怪我がある程度見終わると、驚いた様子で言った。

「かなりぎっくり切ったわね。痛くなかった？」

「痛い」

私がそう言うと、アリスは苦笑した。

「なら痛がるなり泣くなりしたらいいのに」

私は首を振った。

「これが私の精一杯」

私は別に無理に痛いのを我慢して冷静を装っているのではなく、自然体でこうなのだ。そもそも私は痛いと言ったし歩けないとも言った。ちゃんと伝わったと思うのだが、足りなかったのだろうか。もっと言葉を尽くさなくてはならないのだろうか。

「そうなの。……どんな感じ？」

「傷口同士が触れ合って今でも裂かれるような痛みがする。血が止まらないのが少し不安。跡が残ってしまったかわからないのが怖い」

私は傷に関して思っていること全てを伝えた。過不足はないと思う。

「わかりやすく助かるわ。その点に関しては大丈夫よ。ちゃんと血は止まるし、痛いのもなくなる。ここまで大きいと跡になるでしょうけど、小さいものよ」

そう言いながら、アリスは籠の中からガーゼと包帯を取り出して、手当を始めた。見ず知らずの私に医療道具まで使ってくれるなんて嬉しい。

「消毒するから、ちょっとしみるわよ」

「わかった」

消毒液がついたガーゼが、足の裏に当たり、染み入るような痛みが走った。つんとするような臭いに、少しだけ嫌悪感を抱く。

「えっと、踵に包帯を巻く時は……と」

テキパキとしていたアリスの手際が、急にたどたどしくなる。おそらく手当をすること自体は多いのだろう。包帯を巻くほどの怪我は少ないのだろうか。

もしかしたら、こんなやさしい女性にかいがいしく手当をしてもらえるのなら怪我をするのも悪くない、と思う人がいるかもしれない。

アリスの顔に視線を移す。人形なんかとは比べ物にならないくらい美しく凛々しい顔立ちの美しい人。でもそれは綺麗すぎて、見る人によっては彼女に冷たい印象を抱くかもしれない。こんなにも暖

かくて優しい人なのに、もったいないとは思う。

「はい、これでよし……と痛かったわね、賢いわ」

アリスは私の頭を撫でながらそう言った。足に目を見やった。踵から足首に巻かれた包帯は、手つきが拙かった割には綺麗だった。手先が人より器用なのだろう。そうでなければ人形を宙に浮かべるなんてできるわけがない。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで、星空さん」

「漣、と」

私はアリスの目を見つめて言う。

「漣、もしくは星空漣と呼んで」

「名前、嫌いななの？」

頷く。星空。美しくも儂い夜空に輝く星々と同じ名前。本来なら誇るべきところなのだろう。だが私は、この名前を同級生にからかわれ、先生にまで変な名前と言われたせいで、誇らしいどころか嫌悪感を抱いていた。お父さんと私を繋ぐの大切なものだけど、嫌いなものは、嫌いなのだ。

もしどうしても呼びたいというのなら構わないけど、名字だけで呼ぶというのはやめてほしい。

「そう。じゃあ、漣。これからのことなんだけど……」

そうアリスが楽しそうに切り出したところで、変化があった。家の外から空気を切る音が聞こえてきたのだ。それはだんだん大きくなってきて、思わず私は外の方を見た。

「……はあ」

アリスは心底面倒くさそうにため息をついた。その次の瞬間、アリスの家の玄関が開き、外から人が入ってきた。

「ういーっす！ アリス、元気にしてるかー？」

誰だろう。悪い人かな。私は立ち上がり、アリスの前に出る。いざとなったら、盾にならなきゃ。

「うん？ なあアリス、その子誰？ アリスの子供？」

侵入者の問いに、アリスは肩をすくませて首を振って答えた。

なんだろう、アリスに警戒心がない。もしかしてアリスの家族なのだろうか。そう思って、侵入者をよく見る。

大きな三角帽子をかぶり、さながらエプロンドレスのようなデザインの服に身を包んだ、金髪の綺麗な人。アリスとはまた違う綺麗さだった。アリスを人形の美しさに例えるなら、この人は自然の美しさ。雄大で、凛々しくて、それでいてしなやかで。だが、アリスに似ているかどうかで言えば、そうではない。……でも、やっぱり家族かもしれない。私も、お父さんにも母にも似ていないと言われてばかりだったから。

「漣、こいつは魔理沙。霧雨 魔理沙よ。」

まりさ。キリサメマリサ。独特な名前だな。私はそう思った。

アリスの知人だということがわかると、私は警戒を解き、ソファに座る。足の裏を見ると、血がにじんでいた。急だったので忘れていたが、私は怪我をしていたんだ。気をつけないと、傷口が開いてしまうかもしれない。

「私は星空漣と言います。アリスのご友人ですか？」

私がそう聞くと、マリサは不思議そうな顔をしたあと、大口を開けて笑った。

「あはははは！ ご友人だったよ、アリス！ あたしでもそんな言葉使わねえのによくできた子供だな！」

マリサはひとしきり笑うと、私の頭に手を乗せた。

「別に敬語なんて使わなくていいんだぜ？ 子供は、子供らしいだけで可愛いもんなんだからな」

「私は、可愛く見せたくて敬語を使ってるわけじゃないよ」

相変わらず、私の表情筋は機能を果たさなかった。でも、私は喜んでいいるのだ。無理することはない。そう言ってくれたような気がして、嬉しくて。

「私、普通に話していると無感情だと言われるから。敬語の方が、そう言われることが少なくて」

私は感じていないわけではないのだ。ちゃんと痛いも苦しいも、嬉しいも楽しいも感じる。だが、このことについて言葉を尽くして説明して、誤解が解けた試しがない。だから私は、このことに関して他人に理解してもらおうことを諦めた。

「そうなのか？　ま、やっぱり敬語よか親近感湧くよ。さっきよりも百倍いい。今度新しい人に会ったら、そうやって自己紹介したらどうだ？」

「う、うん」

ちよつと馴れ馴れしく感じて、返事が遅くなってしまった。これが、この人の普通なのだろうか。少し疑問に思う。

「……で？　何の用？　魔導書なら貸さないわよ」

アリスはつつけんどんにそう言った。魔法使い、なのかな。

「ああ、貸さなくていいぜ。パチュリーんところから貸してもらおうから」

「あんたの場合は盗み出すでしょうが。早く用件を言いなさい」

アリスがイライラとしながらそう言うと、マリサは肩をすくめた。

「せつかちだな、アリスは」

「いいから」

「わかったよ。霊夢が呼んでるぜ」

その用件に、アリスは訝しげな表情をした。レイムという人に会うのが嫌なのだろうか。

「なんであの子が？」

「行けばわかるぜ。来るか？」

頷いて、口を開こうとして、アリスは私を見た。

「この子がいるわ。だから」

「私、ここで待ってる」

「一緒に連れてけばいいじゃん」

私とマリサは全く別の意見を言った。一緒になんて行っても、足でまといになるだけなのに、この人は何を言ってるのだろうか。

「わかったわ。さ、漣。魔理沙の後ろに乗っけてもらいなさい」

「……うん」

アリスは私を担ぎ上げて、外まで私を連れ出した。外には少し大きめの筭が立てかけられており、マリサはそれをひつつかむと跨った。この人は何をしようとしているのだろう。そしてどうしてアリスはマリサの後ろに私を乗せたのだろうか。

気恥ずかしさで消え入りたくなるような気持ちになっているというのに、マリサは朗らかに言うのだ。

「じゃ、飛ぶから口閉じとけよ。舌噛んじゃまうぜ」

言われたとおり口を閉じる。体が宙に浮くような嫌な間隔に見舞われ、上から豪風が吹いてきて、思わず目を閉じる。再び目を開けるとそこには目を疑いたくなるような光景が広がっていた。

「ここは……」

ここは、知らない世界。そう思い知らされた。本で見た世界地図と、共通点が見当たらない。そしてかつて学校の屋上から見た景色とは、まるで違っていた。ビルもなければコンクリートで舗装された道すらもない。あるのは緑とちよつとの家屋。

「きれいだろ？ あたしもこの景色好きなんだ」

「そう」

幻想郷。ここから元の世界に戻れるのだろうか。不安に思う。もし戻れなかったら今度こそ一人きりになってしまふ、と思うと、耐えがたい寂しさに見舞われた。マリサの腰に抱き着きついて、寂しさを紛らわす。

「魔理沙、もうちょっとゆっくり飛んであげたら？ 怖いのかも」

アリスの声がしたので、その方向を見る。すると、アリスが何も持たずにマリサと並行して飛んでいた。

「うん、速いか？」

「……うん。でも、このままでいい」

このまま、もう少しだけ人のぬくもりを感じていたい。久しぶりに触れた人の体は、すごく柔らかくて、いい匂いがしていた。人って、こんなにもよいものだっただろうか。

少し記憶を探って、自分が最後に人に抱きしめられた、もしくは抱きしめた記憶を思い出す。……吊り下がった母を下ろす時に、抱えたのが最後だった。嫌なことを思い出した。気分が悪くなって、吐き気さえしてくる。

「……」

あの時の母は、思い出したくない。綺麗な人ではあったが、死に顔は凄惨なものだった。口をだらしなく開き、目を見開き、ありとあらゆる穴から汚物を垂れ流していた母。私が死を忌避するのは、死んだら私もあなるのだ、と思っっているからなのかもしれない。あんな物体になるなら、どれほど苦しからうと生き抜いて見せる。おそらく私はそう心のどこかで思っっているのだろう。

「漣、あれが目的地だぜ」

マリサは赤い鳥居のある神社を指さして言った。境内はそんなに広くなくて神社そのものも小さめ。あれは、どんな神様を祀っているのだろう。

「どんな神社？　どんな神様を祀っているの？」

「知らね」

マリサはそっけなく言った。興味がないであろうことは後ろからでもわかった。

彼女は高度を下げ、その神社に接近する。アリスが先に境内に降り立った。マリサも彼女に続いて地面に降りると、私のことを抱き上げてくれた。

「遅いわよ、魔理沙！　……て、そのちっこいの何？　魔理沙の子供？」

神社の中から、肩口が露出した特殊な巫女服に身を包んだ女性が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ上げて、大きなリボンで止めている。マリサもアリスも、そしてこの人も。この世界にいる人は皆、彼女たちのような珍妙な格好なのだろうか。

「私、星空漣。今は、アリスにお世話になってるの」

マリサに言われた通り、丁寧語を使わずに挨拶してみる。

「私は霊夢。よく挨拶できたわね、偉いわよ。……魔理沙が抱きかかえてるのはなんで？」

「この子足をけがしちゃって。一人にしとくのもかわいそうだから連れてきた」

アリスが神社のほうへと足を進めながら言った。

「あんまり知らないところを連れまわしても疲れちゃうだろうし、早く要件を済ませましょう、霊夢」

「わかったわ。神社の中で話しましょう」

レイムは頷くと、神社の中へと歩き出した。マリサも、彼女たちが続く。

「ちよつと話するけど、大丈夫か？」

「大丈夫。ゆっくりお話ししてて。私は考え事しとく」

マリサが呆れたように息をついた。私は彼女を見上げる。

「考え事って。もっと遊んだりとかしねえのか？」

「遊ぼうにも、足がこれじゃあろくに動けない。そもそも私に遊びは必要ない」

「そうかよ。じゃあ、今度あたしが教えてやるよ」

そういつてマリサはニカリと笑った。そんな反応をしてくれたのは、この人が初めてだった。

博麗神社と私

初めて入った神社の中は、意外と普通の家屋だった。畳の上に座らされ、三人は一つのちゃぶ台を中心にして座った。私はすることもないので横になる。眠ればよいのだが。

「で、霊夢。なんで私を呼んだの？」

「この前、あなた外来人を連れてきたでしょ？」

外来人、というのは私のように外の世界から来た人のことを指すようだ。先ほど、アリスに教えてもらった。

「ええ、それが？」

「最近、外来人が多すぎて、厄介な連中も増えてきたわ」

「……私のせいだと言いたいのか？」

「違うわ」

レイムは静かに言うのが聞こえた。

「ただ、外来人を分別なしに保護するのはやめてほしい、ということと言いたいだけ。今日みたいに」

「見捨てたら死ぬかもしれないの？」

「それもやむなし、という状況よ」

私は全身がこわばるのを感じた。もしかしたら、殺されてしまうのだろうか。体を起こして、三人を見る。

「どうしたの？ 喉かわいた？」

レイムが聞いてきた。優しい女性。でも、もしかしたら私の命を奪うかもしれない女性。

「……なんでもない」

「そう」

聞いても、悪く思われるだけだ。私はまた体を横にして、今度は三人の会話に集中する。

「何かあったのか、霊夢」

「ここに来るときに力を持った馬鹿が幻想郷で何かしようと企んで

る、っただけよ」

「……それが、私がここに連れてきた人だ、っわけ？」

アリスが悲しげな様子で言ったのが聞こえた。

「責めるつもりはないわ。ただ、これからは保護するなら保護する、見捨てるなら見捨てるではつきりさせてほしいっただけ。神社ではもう面倒見きれないわ」

「そんなに多いのかよ？」

「一日一人から二人。十日に一度はろくでもないのが迷い込むわ」

「多いな。あたしんここには来たことないぜ？」

「あんたはいつも空飛んでんでしょうが」

「はは、それもそうか」

マリサは笑っているけど、私は気が気でなかった。この話し合いの結果如何で私はどうこうされてしまうのだから。

逃げ出すか？ その選択肢は、すぐに消えた。ここから逃げたらそれこそ絶望だ。

「それはわかったけど、幻想郷の結界はどうなってんだ？」

「それが緩んでるから、大量に外来人が来てるんでしょうが」

「対策はあるの、霊夢」

「幻想郷を外から切り離す」

「今いる外来人はどうなるんだ？」

「結界が安定するまでは、残念だけどここにいてももらうことになるわ」

私はほつと胸を撫で下ろした。よかった。少なくとも、ここに
いる三人に殺されることはないんだ。

「この子は？」

アリスが聞いた。どういう意味だろう。

「ちよつと変な能力もってるけど、まあ帰れるでしょ……？」

レイムがしばらく黙りこくった。

「霊夢？」

「この子、は」

私は違和感を感じて、体を起こした。

「な、なに？」

レイムの目は、なぜか潤んでいた。ゆっくりと私に近づくと、私のことを抱きしめた。痛いくらいに込められる力に、私は戸惑う。

「……あなたは、ここにいなさい。ずっと」

「れ、レイム？」

どういうことだろう。　なんでこんなふうに抱きしめてくれるのだろう。

「元の世界に帰っちゃダメよ」

「なんで？　説明して。理由もなしに帰るなど言われても領けない」

私は静かに言った。レイムもきつと戸惑っているのだろう。私の中に思わず涙を流してしまっただけほど凄惨な何かを見てしまったのだろう。巫女さんなんだから、他人の本質を見抜くくらいはできるだろう。

「おい、霊夢。何勝手なこと言ってるんだ？」

「二人に頼みたいことがあるの」

私を解放し、涙を拭くとレイムは二人に向き直った。

「あなたたちを呼んだのは、さっき言ったことを各地にいる主要人物に伝えて欲しいの」

レイムがそう言うと、二人は訝しげな顔をした。

「……はあ？　なんで私が？」

「なんであたしなんだ、霊夢」

「信用に足るからよ」

レイムは私の隣に座ると、説明を始めた。私のことではうやむやにしたのに、このことではちゃんと説明するのか。もしかしてこの人の中で何か線引きがあるのだろうか。

「外来人を保護するか否かは発見した本人に委ねる。これはある意味で危険な案よ。無差別に広めれば、それは外来人への襲撃を公的に認めたと捉えられかねない。そんなことは、避けなければならぬ

いわ」

レイムは袂に手を入れると、その中から紙を取り出した。そこには地図のようなものが描かれていて、レイムはそれをちゃぶ台の上に乗せた。

「だから、注意して伝えて欲しいことがあるの。これは決定事項ではないことと、外来人を襲うことを認めるわけではないということ。それから、これは試験的運用でもあるから、信頼できる部下にのみ伝えてほしいということ。以上の三点よ」

穴がある。私はそう思った。けれど、それは落とし穴と同じで、人為的に作られたものだ。そう感じた。

これがもし全面的に広まったとしたら、悪意を持った人間は確実に外来人を食い物にするだろう。それを問題視させないための試験運用なのだろうか。それとも、騙すための試験運用なのだろうか。

こんなことをして、騙す相手は誰だろう。外来人だろうか。ここにいる二人だろうか。それとも、幻想郷の人間全てだろうか。「わかったぜ。さとりとか紫とかレミリアとかに伝えればいいんだろ？」

「よくわかってんじゃない。よろしくね」

レイムは優しく微笑んでそう言った。私は半ば無理にでも立ち上がった。足の裏に鋭い痛みが走る。

「大丈夫、漣」

「うん。アリスも行くの？」

アリスはしばらく悩んでから頷いた。なぜ悩んだのだろう。

「じゃあ、私も行く」

「……危険よ？」

「それでも行く」

私はアリスのそばまで痛みを我慢しながら歩く。

「あなたは、ここにいなさい」

「ここはイヤ。行く」

レイムと一緒にいるのは、少し嫌だった。レイムと一緒にいた

ら、最後には閉じ込められてしまうのではないか、そんな恐怖が全身を襲ったからだった。

「……そう。嫌になっただらいつでもここに来なさい」

レイムは残念そうにはしていたけど、特に怒ったような様子や、壊れてしまうような様子はなかった。私は安心すると、アリスの方を向く。

「最初はどこへ行くの？」

私が聞くと、アリスはマリサと目を見合わせた。

「私はこの近くにある紅魔館に行くわ。各地に伝え終わったら、伝書鳩を飛ばすから。あなたもそうして」

「ういつす。じゃああたしは天子んとこ行ってくるぜ」

マリサは駆け出して外に出ると、箒に跨った。

「ごめんな、漣。遊び教えてやれなくて。でも今度会ったら絶対教えてやるからな！　じゃあな、元気でな〜！」

そう言い残すと、返事も聞かずに行ってしまった。まるで、嵐か台風のような人だったな。

「私達も行きましょうか。歩ける？」

頷くと、一歩踏み出す。傷をかばう歩き方をしたせいか、かくりとバランスを崩し、膝をついてしまう。

「大丈夫？　見せてみて」

「大丈夫、歩けるから」

私は強がって言った。もしここで足手まといだと思われたら連れて行ってもらえないかもしれない。そんなことになったら、私はレイムと二人きり。そんなのはイヤだった。

それにしても、なぜ私はただの想像を根拠にこれほどレイムを嫌うのだろう。私は、偏見で人を判断するような人間にはなるまいと思っていたのに。

「霊夢、子供用の靴とかある？」

「ないわ」

だから、ここにいて。そう恫喝されたように感じて、私はアリ

入の後ろに隠れた。恐らく私は何かをレイムに感じ取って、それを恐れているのだろう。愚かな私。

「……えらく嫌われたわね、霊夢」

「まあ、私子供受けよくないから。それじゃあね、アリス、漣。また会いましょう」

そう言うとレイムは神社の奥の部屋に消えていった。

「足、どうする？」

「歩く」

「傷開くわよ？」

「構わない」

とにかくここから出たい。こんなにも一つの場所を恐れる自分に憎悪さえ抱く。レイムだって私を迎え入れて、抱き締めてさえくれたのに、なぜ私は恐れるのだろう。よくわからない。わかりたくもないような気がする。

「はあ。あなた、頑固ね」

「足手まといにはなりたくない」

アリスはまたため息をついた。怒らせただろうか。

「もう。わかったわよ。急ぐ用事でもないでしょうし、ゆっくり行きましょ。辛くなったり痛かったりしたら言いなさい」

「ありがとう」

私はお礼を言うと、境内を素足のまま歩く。おもわず叫びそうになるくらい痛むけど、嫌われたりするわけにはいかないのだ、黙って歩く。アリスと一緒に境内を出て、階段を降りる。それから、土がむきだしになった街道を歩く。

「漣、紅魔館に行ったら次は永遠亭に行くわよ」

「永遠亭？」

なんだろう、その素敵な響きは。永久を手に入れられる場所、とかならば素晴らしい場所だな、と思う。

「病院よ。流石にちゃんとした医者に見てもらいたいでしょ？」

病院、か。お父さんに行くなと言われてからは、行っていない。

大病を患えば死が確定するが、お父さんが言つのなら、別にそれでもかまわない。

「病院はいや？」

「ううん。久々だな、って思ってた」

「へえ。具体的には？」

「四年くらい」

アリスは驚いた。

「すごい。怪我もしなかったの？」

私は首を振った。

「行かなかっただけ」

「え、お父さんとかは？」

私は首を振った。大人なら、これだけで理解してくれるはずだ。普通の人に、私とお父さんとの絆は理解できないだろうから。

「ご、ごめん」

「いい。謝ってくれるだけ、嬉しい」

お父さんは死んだ。そう伝える方が、お金だけ送って来てあとに放ったらかしというのよりも理解されよい。お父さんのことで嘘をつくのは気が引けるけど、こんなことでそうダラダラと会話するのモイヤなので、私は話を切り替える。

「紅魔館って、どんなところ？」

「え？ ……吸血鬼、レミリア・スカーレットの住居よ」

吸血鬼。血を吸いとる鬼。そんな恐ろしい存在がいる場所に自ら足を運ばねばならないことを、私は嘆いた。

「怖い？」

「うん。でも大丈夫」

私は上手く踵をかばいながら歩く。ひよこひよここと変な歩き方になっているが、アリスは笑おうともしない。優しい人だな。

「ふうん。まあ、ほんと無理だけはしないでね」

「うん」

吸血鬼ってどんなのなんだろうか。それこそ、人を食糧にしか

見てないような、そんな存在なのだろうか。……私、外人だし、食べられるのかな。

「まあ、すぐには紅魔館に着かないし、ゆっくりおしゃべりでもしながら行きましょ」

「うん」

暇しないように配慮してくれるのが、嬉しかった。この気持ち
を笑顔で表現できない自分が恨めしい。

「アリス、ここは妖怪がたくさんいるの？」

「まあね。でも大丈夫よ。私を守るから」

そう言つてアリスが指をひらめかせると、周りに浮いていた人形達の手に様々な武器が握られていた。斧や槍、剣などの恐ろしいものを可愛らしい人形が持っているのが、不気味だった。

「それで、殺すの？」

「殺しはしないわ。撃退するだけ。まあ」

「人間だー！」

甲高い声が聞こえた。周りが闇に閉ざされる。まだ昼間だとい
うのに、なぜ。

「あなたは、食べてもいい人間？」

声が聞こえる。想像するに、女の子の声だ。年齢は私と同じく
らしいの、小さい子。その子は、きつと今私の後ろにいる。息が右の
耳にかかるほど、近い場所。多分、この子は妖怪だ。人を食うよう
な、怖い妖怪。おそらく私の心臓の鼓動さえ、気取られているのだ
ろう。

なんと答えたら、助かるのだろうか。なんと答えたら、殺されて
しまうのだろうか。

「答えて？ あなたは、食べてもいい人間？」

彼女の問いにどう答える。肯定する？ その場で齧られ、食
われてしまうかもしれない。否定する？ もしかしたらこの質問
はただ趣味で聞いてるだけで、嫌がる人間を食うのがいい、とか言
われるかもしれない。

「答えないの？ 食べちゃうよ？」

「やめなさい。ルーミア、その子は食べてはいけない人間よ。手を出さないで」

暗闇の奥から、アリスの声がした。

「そーなのかい。じゃあ、かえるのだ」

そう言うと、子供の妖怪……ルーミアは去って行った。闇が晴れ、視界が戻った。一步も動かなかったため、景色は変わっていなかった。勝手に移動させられたということはなさそうで、よかった。「大丈夫、漣」

アリスが私のそばに駆け寄ってくれた。よく見ると私の周りに人形がたくさん浮いている。いざとなったら、あの妖怪と戦ってくれたのだろうか。

「うん、大丈夫」

「驚いたわ。普通の子は驚いて騒いだり走ったりして大変なことになるのに」

アリスは歩きながら感心するように言ってくれた。私はアリスについて歩く。足の痛みにもなれた。

「私は、いつでも冷静だから」

「そうね。でも、怖くなかった？」

私は素直に答えることにした。

「もうここで食べられて終わっちゃうんだって思った」

「そんなこと思ってたのによくじつとしてられたわね」

「生きるためなら、なんでもする」

私は静かに言った。この先泥水をすすするような目に遭っても、生き抜く。

死にたくないから。母と同じになりたくない。またお父さんと会いたい。だから、死ねない。

「随分と固い決意ね。すごいわ」

「ありがとう、アリス。……ところで、ルーミアはどんな妖怪なの？」

私は質問してみた。今度一人でルーミアに遭っても死なないよ
うにするための、情報が欲しかったからだ。

「あの子は闇を操る人食いよ」

「私を食べようとしてたのかな」

アリスは奇妙なことに首を振った。

「まあ、そうなんだけどね。でも、無理矢理食べられたりしないわ。

あの子、食べてもいいか聞いて、許可がもらえないと食べてこ
ないから」

「どうして、妖怪なのにそんなルールに縛られてるの？」

私の中の妖怪という存在に対するイメージは、自由奔放、気ま
ぐれで人を殺したり救ったりするような強大なものだったのに。随
分と、イメージと違う。

「まあ、どんな妖怪も多かれ少なかれルールの中で生きてるわ。も
ちろん、そのルールを破る奴もいる。……そこは人間も一緒でしょ
？」

私は頷いた。

「わかってくれて嬉しいわ。で、ルーミアはルールに縛られている
タイプの妖怪よ。ルーミアに食べられたくなかったら、私は食べて
はいけない人間です、って言えばいいのよ。簡単でしょ？」

頷く。なんだ、変に深読みをしてしまった。そんな単純なものだ
ったら、素直に答えるべきだったな。情報がなかったのだから仕方
ないといえば、仕方のないだろうが。

だが、これからは情報を多く取り入れるよう注意しなければ。知
らないことが理由で、死にたくない。

「アリス、話は変わるけど、外来人ってどんな人があるの？」

すると、アリスは困ったような顔をした。聞いてはいけないこと
だったかな。

「ううん、多すぎて一概には言えないわ」

「じゃあ、たとえば、外来人が近づいてはいけない場所とか、しち
やいけないこととか、ある？」

この質問にも、アリスは言葉を濁すだけだった。

「まあ、ないことはないけどね。あなたにはどう頑張っても無理だから安心して過ごしなさい」

「なんにもないの？」

アリスは少しためらって、頷いた。

「まあ、そりゃ入ったら怒られちゃう場所はあるけど、それも外人だから、で特別に案内するとかあるから……」

私は驚愕する。なぜこんなにもこの人は警戒心がないのだろう。そんな私の疑問を感じ取ったのか、アリスはにっこりと笑った。

「この人、基本的にお人よしが多いから」

「そうなんだ」

私はそう言うのとほぼ同時、道が開け、視界いっぱい湖が広がる。思わず、声が漏れる。これほどきれいな景色を、私は見たことがない。そして、湖の奥には赤い館があった。

「あの奥にあるのが、紅魔館。さ、行きましょう」

アリスは湖の円周沿いに歩き始めた。

紅魔館への道のりと私

綺麗な湖を眺めながら、私とアリスは歩いていた。舗装されていない道を歩くのは辛いけれど、我慢する。だんだん慣れてきたし。

左側にはアリスが歩いていて、その背景にな森と青い空があった。右を向くと、目を見張るような美しい湖が見える。

水面は光り輝く網をはったように太陽の光を乱反射し、まぶしいくらいにきらめいている。湖の水は、ここからでも中心の底を見れるんじゃないかと思うほど透き通っていた。

「この湖、おきにいり？」

「私はこの景色を美しいと思う。だから、好き」
アリスの方を見る。

「素直にキレイだから好きって言えばいいのに」
アリスは苦笑しながら言った。

その様子は、まるで親しい人間にするような、柔らかい顔だった。私がアリスの家族になったかのような錯覚に陥り、それを振り払おうと首を振る。

「どうしたの？ また何か理由があるの？」

「違う。アリスと家族になったような感覚がして。それを頭から振り払っていた」

アリスはしばらく悩むような仕草をした。やはり、気持ち悪がられたらどうか。せつかく仲良くなれたのに、残念だ。

「別に、いいけど」

「……？」

「いい？ 何がいいのだろうか。」

「別に、家族になってもいいよ」

「……本気？」

私に新しい家族ができる？アリスが、こんなに優しく綺麗なが私の家族に？

「本気も本気」

「……なぜか、聞いてもいい？」

アリスはしばらく顎に手を当てて悩んだ。本人もわかりかねているのだろうか。すっかり悩んで、結論を出して欲しい、半端な考えで家族になつて、いらぬから、で捨てられるのは嫌だから。

「私、あなたを助けるって決めたから。霊夢が言うには長いこと滞在してもらわなきゃいけないのよね。その間ずっと一緒にいるわけだし、それってもう家族と一緒にでしょ？　まあ、あなたが帰るくらいまでなら、ね」

私はすぐに頷くことができなかった。家族が一緒にいるのが当たり前かのように言われて、戸惑ったのだ。やはり私はおかしい。そう再認識した。

「私、アリスの家族になるの？　なつていいの？」

「ええ。この際だし、別にいいわ。でもちゃんと帰るのよ？」

ああ、なぜ私は笑顔や仕草で喜びを、この全身を包む幸福を表現できないのだろうか。

私は自分のできる精一杯として、アリスに抱きつくことにした。

「ありがとう、アリス……お姉ちゃん」

「お母さんと呼ばれる覚悟だったんだけど……。まあ、いいか」

アリスは照れ臭そうに頬をかくと、まあ、家族だしね、と言って抱きしめてくれた。

お母さんではだめ。お母さんと呼んでしまえば、アリスも母のよう……。うに……。

「漣、震えてるわよ？」

「嬉しくて。喜びに打ち震えるというものだと思う」

私の言い訳を、アリスは信じてくれた。私はお礼を言つてアリスから離れる。私は震える体を無理に動かし、湖の奥に見える紅魔館を目指す。

「漣、どうしたの？」

すぐにアリスが追いついてきた。

「なんでもないよ」

吊り下がった母の遺体が思考の端から消え、体の震えが止まると、私はアリスのそばに行って手を繋いだ。姉妹はこうするものだったからだ。

「おー？ アリスじゃない！」

紅魔館へ進もうとしたとき、声がした。私達の目の前に氷の粒が集まって、それは人型をとり、やがては一人の女の子になった。

その子は短い水色の髪に、水色を基調としたブラウスを着ていて、背中には三対の氷柱が翼のように生えていた。

「こんにちはチルノ。用事があるからあんたの相手はしてやれないの。どっか行って」

アリスは冷たくあしらうように言った。

アリスが誰にでも分け隔てなく優しくするような人間でないことがわかって、少しだけ安心する。

聖女と共に暮らす自信はない。

「私が相手してほしいのは、その人間なのだ！」

チルノ、とアリスに呼ばれた子供は私のすぐそばまで来て言った。空気が急に冷え込んだような気がする。私の本能が警鐘を鳴らしているのだろうか。

警告に従い、私は何歩か後ずさる。

「おー。なんの力も持ってない人間だ。名前は？ あたいは『氷精』チルノ！ 氷を自在に操れるのだー！」

氷を、自在に？ そんなもの、人間が、少なくとも私が叶う相手じゃない。なんとかして生き残らなければ。どうする。

「私は星空漣」

アリスの名前を名乗リたかったけど、教えてもらっていないから名乗れなかった。あとで聞こう。生き残れたら。

「ほー。星空か。いい名前だな！」

「漣って呼んで」

チルノはあっさり頷いた。

「わかったぞ、澗！ さあ、弾幕勝負だ！」

そんなことを言って、チルノはいきなり攻撃してきた。氷粒がいくつも、無数に飛んでくる。

知覚はできている。ちゃんと見えている。けれど、避けられない。私はまだまだ未熟な上に華奢だ。怪我也してる。

氷の弾の雨にさらされた私は、後ろに吹き飛ばされて地面に転がる。お腹が痛い。体がうまく動かない。

「チルノ！ あんた何してるの！？いきなり撃つとか何考えてるのよ！」

「い、いやまさか本当に何もできないなんて思わなくて、あっさりよけて反撃するんだとばかり……」

「あんた澗の力量見切ってたでしょ！？」

「あ、あれは、その、なんていうか……」

「なによ」

「当てずっぽう……」

「ああ、もう！ とつとと失せる！」

「わ、わかったのだ。ご、ごめん澗。」

それきり、チルノの声はきこえなくなった。アリスが駆け寄ってくる音がした。

「大丈夫澗！？ お腹見せて。内出血してわね。痛い？」

抱き起こされ、聞かれる。正直、傷みはもう引いている。

「チルノのこと、許してあげて」

「はあつ？ なんの澗があいつを庇うのよ？」

「あの子はきつと、ただ子供なだけで、普通に悪気があったわけではないはずだから」

悪意があれば、去り際謝るなんてことしないだろうし、そもそも私は死んでいるだろう。

「優しい子ね」

私はそう言われて嬉しかった。ここに来る前はなにを言っても何をしても、誰も何も言ってくれなかった。気味が悪いといって近づ

いてもくれなかった。

それなのに、ここの人達は。

「ありがとう、アリスお姉ちゃん。もう歩けるから」

自力で立ち上がると、ふらつきながらも歩き出す。アリスも心配そうについてくる。

「そうだ、アリスお姉ちゃん」

「どうしたの？」

私は紅魔館を見つつ、アリスに聞く、

「アリスお姉ちゃんの名前はなんていうの？ 私、お姉ちゃんの名前を名乗りたくて」

星空。こんな名前、いらぬ。いくらお父さんの名前でも、関係ない。お父さんとは血が繋がっているんだから、名前が違ってても繋がって入れるはずなんだ。だったら、こんな名前は、捨てる。

「マーガトロイドよ。そんなに名前が嫌？」

頷く。私は今から、遷……。

ミオ・マーガトロイドだ。少なくとも、この幻想郷にいる間は。

「じゃ、行こうかアリスお姉ちゃん」

「わかったわ。ホントに大丈夫？」

「大丈夫」

私はそう言うと、少しだけ歩む速度を上げた。傷みが増してくるけど、構いやしない。

歩いてからかなり経って、紅魔館の門が見えてきた。遠くで見たときはそうでもなかったのに、今見ると物凄く大きな館だ。壁から屋根、窓枠に至るまで全てが朱色に染められているところは、さすが吸血鬼の住処だ、と思った。

「こんにちは、アリス。今日はどんな御用ですか？」

赤く染まった門の前には、中華風の衣装に身を包んだ女性がいて、アリスにそんなことを聞いた。門番さんだろう。ここまで大きい館なら、門番くらいはいて当たり前なのだろうか。

「今日はレミリアに伝言があって来たわ」

「……伝言？」

「ええ。霊夢からの大切な伝言よ。通してもらえる？」

「……何か書類はお持ちでしょうか？」

「持ってないわ」

そうアリスが言うと、門番は少々お待ちを、言っただけで門の中に入った。話し声が聞こえるのでおそらく内線か何かで主と連絡をとっているのだろう。

「妙に嚴重ね」

「いつもは違うの？」

アリスが不思議そうにしていたので、聞いてみた。すると訝しげな顔をしたまま、私に教えてくれた。

「いつもは用件言えば大抵通してくれるのよ。そもそも昼寝していることもあるし」

「門番がそんなので大丈夫なの？」

「まあ、この主は強いから。ちよつと腕に自信がある、くらいで忍び込んだところで夕食にされるだけだからね。……まあ、今日は様子が違うのだけど」

「どうしてだと思う？」

アリスは肩を竦めた。興味がないのだろうか。もしかして、アリスはあまり他人に興味がない？

「お待たせしました。通ってよい、とのことですよ。それでは、お通りください」

門から出てきた門番は、私たちを中へと案内した。

「ありがと。美鈴」

「いえ」

そう言っただけで一礼したメイリンという女性は、私たちを見送ると再び門番としての仕事を果たすため、門の外に立った。

クールビューティという言葉が彼女ほど似合いそうな人は、今まで見たことがなかった。

「どうしたの？ 美鈴の方はっか見て」

「……なんでもないよ」

私はアリスに促され、ちゃんと前を見る。赤い大きな扉が目に入ってくる。この先に、吸血鬼がいるのか。

思わず震えそうな体を感じながら、私はアリスについていく。無意識的に、ぴったひと寄り添うように歩く。アリスは私を見てにこりと微笑んで、扉を開けた。

「いらつしゃいませ、アリス様。お嬢様がお待ちです」

広々としたエントランスの中央で、メイド服にみをつつんだ人形のような女性が待っていた。彼女は綺麗なのは綺麗なのだが、なぜだか、背筋が凍るような悪寒を感じた。

「……はじめまして」

そう私に言ったメイドの瞳は、夕日のような真紅だった。

吸血鬼と私

真つ赤な扉が等間隔でいくつも続く、真つ赤なカーペットが敷かれた廊下を、私とアリスはイザヨイサクヤというメイドに先導され歩いていった。

「……ね、ねえサクヤさん」

「なんででしょうか」

冷たい声が浴びせられる。体の芯から冷えるような感覚がして、少し震える。怖くなって、アリスの手を握りしめた。

「あ、あなたは、吸血鬼……なんですか？」

「……さあ……。そうですね、とも言えますし……違います、とも言えます」

「どうということなのだろう。……ハーフなのだろうか。いわゆるダンプールという人種。」

「……興味があるのですか？」

「え？」

「吸血鬼に」

私は首を振った。サクヤは前を向いているから、話さなくてはならないことに気づくのに、しばらくかかった。

「う、ううん」

「そうですね」

サクヤの声が怖い。まるで、調理台の上に乗っているような、そんな嫌な気分。

「ねえ、咲夜。あなたはもし外来人を好きにしていいたいと言われたら、どうする？」

「なんで、アリスは今そんなことを言うのだろう？ 反応が気になるのだろうか。サクヤはここで初めて、振り返って私の方を見た。視線だけで、貫かれたような気分になる。」

「その少女を私に……。そういう意味ですか？」

「違うわ。どうするか知りたいだけ」

この人はどんな反応をするのだろう。お願いだから、普通の反応をして。そう心の底から願う自分がいた。

「そうですね。もしそのようなことになったら、お嬢様と妹様の食材を安定して調達できますね」

思わず、アリスの後ろに隠れてしまった。

「ちよつと、溲？ どうしたの？」

「……な、なんでもない」

アリスの影から、サクヤを見る。普通の女の人にしか見えない。だけど、人とは違う何かを、この人は備えていた。

廊下の一番奥にある大きな扉の前まで来ると、サクヤは静かにノックした。

「お嬢様。お客様をお連れ致しました」

「わかつたわ。お通しして」

扉ごしだというのに丁寧に礼をしたところを見ると、この人の主人に対する忠誠はかなり高いものだということがわかった。サクヤは重そうな扉を片手で開けると、私たちに中へ行くよう手で促した。中に入っても私はサクヤに対する恐怖が消えず、彼女の方を見ていた。

「それではお嬢様、失礼致します」

「ええ。ご苦労様」

「ありがたきお言葉」

私達が部屋に入ると同時、サクヤが消えた。足音一つさせずに消えるなんて。暗殺者が何かなのだろうか。

「ようこそ、アリス。久しぶりね」

私はここで初めて、紅魔館の主を見た。

王様が座るような赤い豪華な椅子に座っているのは、私と同じかそれより下の年齢に見える、幼い女の子だった。西洋人形のように整った顔立ちをしていて、ネグリジェのような服装が、幼さを一層引き立てている。この子が、吸血鬼。私達人間を食らう、化け物。

彼女は私を見て、舌なめずりをした。背筋に冷たい汗が流れる。

「……あら、お土産？ 気が効くじゃない」

「違うわ、レミリア。外来人で、私の妹よ」

「へえ」

レミリアという吸血鬼は、興味深そうに立ち上がると、私のすぐそばまで来た。レミリアの顔が、視界いっぱい広がる。全身が恐怖で凍りつき、レミリアの紅い瞳から目が離せない。殺されてしまふのだろうか。臓腑を撒き散らし、私を咀嚼するレミリアを想像する。その様は酷く似合っていて、神秘ささえ醸し出していた。

「……あなた、私のことが怖くないの？ 吸血鬼だってわかってるのに」

「怖い」

そう言った私を、レミリアはじっくりと観察する。何を見られているのだろうか。全てを見られているのだろうか。

「この子、面白いわね、アリス」

「面白い？」

アリスがレミリアに聞いた。怖いと言った私を気遣ってか、レミリアの前に立ってくれる。私はすかさず、アリスの後ろに隠れる。「そうね。心拍数も呼吸も体温も全て、恐怖を感じた時と同じものなんだけど、表情だけは平静そのもの。眉ひとつ動かさない。でも、怖いよね」

にやりと、レミリアは嫌な笑みを浮かべた。

「うん」

頷いた私に、ずっとレミリアが青白い指先をのばした。顎のラインをなぞるように動く指。恐怖からか、くすぐったいからか、背筋が凍るような感覚がする。

「随分と、うまく表情を殺すじゃない。どれ、ちょっと運命を……」
そう言ったレミリアの顔色が変わった。私の顎にあった手が離れ、それは彼女の美しい口元に。

「あなたの運命は……凄まじいわね」

「運命？」

私は首をかしげた。

「そう、運命。いずれ来るべき未来。避けることのできない決定事項。私はその一部を読むことができ、ある程度の干渉もできる」

私は黙って話を聞く。聞きたいことはあるが、それは全てレミリアが話終わってからだ。私の命は今、レミリアが握っているのだから。

「あなたの運命は強力すぎて微調整すらできないけど……」

そう言うと、レミリアは私の耳元に口を近付けた。耳たぶを齧られると思った私は、一歩下がった。

「とって食いやしないわ。内緒話がしたいだけ」

そう言うと、もう一度レミリアは口を私の耳元に近付けた。

彼女の冷たい吐息が耳にかかってくすぐりたい。思わず声を出してしまいそうになるのを、必死で抑える。

「これからきつと、死を懇願したくなるような目に遭うわ。そうなったら、一人でここにいらっしやい。楽にしてあげるわ」

その言葉が、心の奥の奥まで染み渡った。ような感覚がした。そして同時に、得体の知れない根源的な不安が、全身を包んだ。

「どういう、こと？」

「それは、来てからのお楽しみ」

そう言ったレミリアの言葉が、足の先から頭の上まで駆け巡った。気持ちの悪いような、でももっと聞いていたいような、不思議な感覚だった。

「……ふふふ。で、アリス。どんな伝言なの？」

私から離れると、レミリアは子供のように笑いながらアリスに聞いた。レミリアの声がもう少しだけ聞きたくなくなって、思わず一歩前に出た。

「……外来人の処遇に関してよ」

「何？ 絶対に保護しなきゃいけないくなったの？」

不快そうにレミリアは顔を歪めた。その顔すらも美しく思えた。

私はこの時、自分の異常に気付いた。最初は恐怖の対象でしかなかったレミリアが、非常に魅力的に、あるいは神秘的に感じるようになってきているのだ。

私の感じていた恐怖は、心を歪ませてでも解消しなければならぬほど強くはなかった。にも関わらず、私の中の感情は劇的というほど変化していた。なぜか。

「逆よ。必ずしも保護する必要はなくなった、ということよ」

「へえ、それは重畳。実に喜ばしいことだわ」

皮肉めいたその言葉をもっと聞いてみたいと思う私は、おかしいなぜ。私はレミリアに好意を持っている？ 血を吸う鬼を好きになるなど。

「無差別にやってはダメよ」

「わかってるわ。伝言ご苦労様。それじゃあね、アリス」

「ええ」

アリスが踵を返し、部屋を出ようとする。私はずっと、レミリアを見ていた。視線が彼女から離せない。ずっと、見ていたい。

「漣、何してるの？ 早く行くわよ」

「え、あ、うん……」

私は名残惜しげに、レミリアから視線を外し、アリスのそばまで歩いた。

「咲夜。お客様がおかえりよ」

レミリアがそう言って手を叩くと、私たちのすぐ前にサクヤがいた。恐ろしい思いは、すぐに全身を包んだ。

レミリアには好意を、サクヤには嫌悪と恐怖を抱く自分に不安を感じる。何かされたのだろうか。……レミリアに。

「館の外までご案内します」

「よろしく、咲夜」

外に出たらアリスに相談しよう。優しいアリスのことだ、きっと、相談に乗ってくれる。

私は淡い期待と共に、サクヤと一緒に外へと向かった。

レミリアに対する好意は、歩く度に強くなっていった。自分の意思とは関係なく強くなっていく気持ちが悪ろしい。

そして、好意や恐怖を感じる自分と、こうして冷静に自分を考え
ている自分との距離が離れていつているような気がするのが、妙に
気になった。

感情の変化と私

アリスに相談しようにも、どう切り出せばいいかを悩んでいる内に、私はついにその機会を逃してしまった。つまり、私はレミリアに対する好意を消したくないと思うほどになっていた。

レミリアに会えない寂しさを感じながら、紅魔館を出てしばらく歩いたところで、神社から素足のまま歩き通しの私の体に限界が来た。足から力が抜け、砂利だらけの道に思い切り膝をついてしまう。

「漣、大丈夫!？」

アリスが私の顔を覗き込んでいた。これがレミリアの顔だったらどれほどよかっただろうか。

そう心の底から願う自分が恐ろしかった。一体、何をされたのだ、私は。

「大丈夫。足から力が抜けただけ。何も問題はない」

「大有りよ! ……って、あなた」

私を覗き込むアリスが、驚愕に目を丸くした。

「あなた、目が」

「どうしたの?」

紅い。そう言われて喜びを感じたのは、レミリアに好意を寄せる自分だった。絶望を感じたのが、冷静な自分だった。

「目が、紅い」

「そう、真っ赤よ? ……さっきレミリアに何かされたの?」

「多分」

アリスの肩を借りて、立ち上がる。足の裏が痛むが、この痛みは覚悟しているので、もはや問題ではない。問題なのはむしろ、もはや恋心や、愛と呼べるほど強まったレミリアへの好意だった。まさか、人間の男性に恋する前に吸血鬼の女の子に恋をするなんて。なんて、数奇な。

「何をされたの? 今、どんな感じ? 説明できる?」

「……わからない」

「わからない？」

「何をされてるのかは、わからない。でも、どんな感じかは説明できる。曖昧な表現を含むかも。いい？」

頷いてくれたアリスに、私は必死で伝えようと決める。今しかない。今伝えなければ、私の心は彼女でいっぱいになって、彼女以外の何も考えられなくなるかもしれない。

歩こうとして、アリスに止められた。

「無理しないでいいから、早く話して」

「……わかった」

私は口を開いた。

「あの時、レミリアに会ってから私の心が激変している」

「……激変？」

頷いて、続きを話す。

「具体的には言えないけど、レミリアを求めてる。際限のない気持ち心が心の奥から湧き上がってきて、頭の中が溢れてしまいそう。このままでは、彼女のこと以外何も考えられない人形のようにになってしまうかもしれない」

「……そんな、レミリアが、そんなことを？ あなた大丈夫なの？」

私は首を振った。素直な、でもかなりワガママな気持ちを伝える。多分、冷静な自分が頭から追い出された時点で、恐れている瞬間は訪れる。だから、その前に。

「アリス」

「な、何かしら」

会ってからあまり経っていないアリス。私が、こんなことを言うていいのか。悩むけど、言わなければ。今、ここで。

「助けて」

ピクリと、自分の体が震えた。レミリアに対する愛情が、弾けたように強まった。急な感情の変化を、私は受け止めきれなかった。その場で蹲ると、今こうして冷静に考えている自分を必死に保とう

と努力する。

「漣！？ ……あのドラキュラ！ やっていいことと悪いことが…
…！」

ドラキュラ。そんな蔑称のような呼称でレミリアと呼ばれたことが、非常に腹立たしく思う。そう思った自分を見限りたい気持ちを抑えて、ひたすらに溢れる感情から冷静な自分を守る。

「……………永遠亭しかないか。漣、急ぐわよ。怖いけど、耐えてね」

そう言っていると、私は宙に浮いた。急に空に浮かされたというのに、もう恐怖すら感じなくなっている。目を閉じればレミリアが思い浮かび、目を開ければ驚くような早さで景色が流れていく。

森を歩き、竹の林を飛んで抜けた先にあったのは、小さな庵のような家だった。

「永琳！ 急患！」

ドタバタと慌ただしくくらいに急いだ様子の着地に、庵の中から左右非対称の色をした奇怪な服をした女の人と、ウサギ耳をつけた女子高生のような格好をした女の人が出てきた。

「アリス、急患って……………。その子の足？ 大したことないわ。化膿してるけど消毒すれば……………」

「この子、レミアに何かされたみたいなの！ 助けてあげて！」

もはやどうでもよくなった足の傷を言ったエイリンという女性に、アリスは私を差し出すようにして見せながら言った。

「あら、この子の目……………」

「何？ わかったの？」

頷いたエイリンは、静かに私の症状を的確に告げた。

「魅了されかかっているわ、この子。確かに急患ね。じゃ、処置するからアリスは居間で待っていて」

そう言って、私はエイリンに受け渡された。……………もう、限界が近い。

「……………よ、よろしく、お願いします」

「ええ、わかったわ。よく耐えたわね。偉いわ」

ニコリと笑ったエイリンを最後に、私は耐えきれなくなって、冷
静な自分を失った。
でももう大丈夫。そう思えた。

お姫様と私

……。
「で？　永琳。レミリアのバカはなんだって溇を魅了なんてしたの？」

アリスの声が聞こえる。なぜかひどく苛ついたような声色だった。「うっん、なんていうかね、この件に関してレミリアは悪くないのよ」

「なんでよ。この子、レミリアに魅了されたんでしょ？」

アリスの怒ったような声が聞こえる。それに、エイリンの声も。彼女は少し申し訳なさそうな声色だった。

「それは間違いないわ。でも、それ以上にこの子の能力が今回の件の原因ね」

「……能力？」

エイリンはアリスの問いに、しばらく答えなかった。目が覚めきった私は、目が覚めたことを悟られないよう注意しながら、二人の話聞く。

「幻想郷の流儀に乗っ取って彼女の能力を表すなら……『特殊能力を増幅する程度の能力』ってところかしら」

程度？　能力？　……増幅？　嫌な予感がしつつも、私は聞くのをやめなかった。聞かないことはできる。何？　みたいなセリフを言いながら体を起こせばよいのだ。二人とも声を潜めているだ、きつと私には聞かれたくないのだろう。……でも、私はこうして聞いている。

「それが、原因？」

「そう。しかも、彼女の能力は、他者へ干渉する力を持ってないから、必然的に他者から受けた特殊能力を増幅することになるわ」

「ようするに？」

「ようするに、支援効果と、敵からの体に留まるタイプの攻撃全て

を増幅することになるわ」

私は何を言われたのか理解しなくなかった。つまり、私は。

「……この子、チルノの攻撃食らってたけど」

「体を買いた？ 違うでしょ？ 体の中に入った時点で増幅されるから、もしあの子の攻撃が澪ちゃんの皮膚を突き破って体の中に留まったら、もしかしたら氷のオブジェになってたかもね」

椅子が弾かれるように動いた音が聞こえた。アリスが驚いて立ち上がってくれたのかな。

「……レミリアに魅了されかかったのは、あの子がレミリアの視線にこもった僅かな魔力を……」

「増幅し続けた結果、というわけよ。まあ、澪ちゃん的能力はまだ未完成。完成したら特殊能力を食らったら死ぬ世にも珍しい子供になるわ」

特殊な力を持つてる人って、この世界にどれだけいるんだろう？

私はどれだけその人たちと会うのだろう。それが不安だった。

「……そう。わかったわ」

「理解してくれて嬉しいわ。そろそろ麻酔が切れて起きる頃だから、不審に思われないよう何か話ときましょ。何か話題ある？」

アリスは呆れた感じのため息をついた。

「あんたいつもにまして尊大ね……」

「ま、患者じゃないし」

「はいはい、わかったわよ。……話題はあるわ」

「聞かせて貰いましょうか」

「外来人の処遇について、よ」

そろそろいいだろう。私はゆっくりと体を起こした。お腹に感じていた妙な痛みも、足の裏の擦れるような痛みも、私の中にあつた燃えるような情愛も全て消え失せていた。

私の中にあるのは自分で制御できる正しい私だけだった。ほっと、胸を撫で下ろす。

「あら、おはよう」

「おはよう、エイリン。おはよう、アリスお姉ちゃん」

エイリンは診察室のような部屋で、お医者さんが座る場所に座っていて、アリスは患者さんか、患者さんの保護者が座る場所に座っていた。私はその隣にある小さなベッドに寝かされていたようだ。自分の見回すと、パジャマから白い入院患者が着るような服に着替えさせられていた。なぜ、誰が、私の服を着替えさせたのだろう。少し気になる。

「あら、自己紹介したかしら？」

私は首を振った。

「私の名前はミオ・マーガトロイド。アリスお姉ちゃんの、妹です」
私の自己紹介を聞いて、エイリンは目を丸くした。そのまま、アリスに視線を移す。

「この子が、あなたなの？」

「何よ。文句あんの？」

「私は、この幻想郷にいる間だけ、アリスお姉ちゃんの家族にしてもらいました」

そう私が言うと、エイリンはさらに驚いた様子を見せて、そして大きく笑った。

「ふふ、アリス、あなたの数倍、人間ができてるわね」

「うるさい」

頬を膨らませて、アリスは言った。

「…… 外来人の話なんだけどね。これからはそんなに躍起に外来人を保護しなくてもいいわよ」

「詳しい話を聞かせてもらえるかしら」

「いいわ」

黙って話を聞いていた私に、エイリンが何かを思いついたような表情をした。

「あなたはここを好きに見ててもいいわ。地下には入らないでね」
どうするかをアリスに目だけで相談すると、アリスは笑顔で頷いてくれた。

「じゃ、いつてきます。ありがとう、エイリン」

私はお礼を言うと、診察室の扉を開けて、外に出た。木の廊下に、襖の扉。まるで昔話に出てくるような作りの日本家屋だった。

「あ、目が覚めたんだ。元気になった？」

廊下の右と左、どちらに行こうか悩んでいる私に、そんな声がかかった。右を向くと、廊下の奥からウサギ耳をした女の人と、その人にぴったりと寄り添うような形で歩いている男の子がいた。男の子は綺麗な顔立ちをしているけど、表情は暗い。私と同じ、入院用の白い服を着ている。

「はじめまして。ミオ・マーガトロイドです。エイリンから地下以外を好きに見て回ってもいいと言われました」

そう言うと、ウサギ耳の女の人は驚いたような顔を一瞬すると、笑顔になって私の頭を撫でた。

「すごい、すごい。よく自己紹介できたね。私は麗仙。で、こっちの子がノーマ」

ノーマと呼ばれた子は、私に小さく一礼しただけで、挨拶一つしなかった。

「私は、ミオ・マーガトロイド。よろしく、ノーマ」
嫌われたのだろうか。いつものことだ。いちいち気にしないことにする。

「あー……。澪ちゃん、この子は口が利けないの」
「失語症？」

確か、言葉を失うことをそう言ったと思う。

「う、ううん、ちよーっと違うかな。なんていうか、口を開かないの。話す気力もない……のかな？」

レイセンの質問に、ノーマは悲しそうな顔をして首を振った。
…何か、ノーマにはあるのだろうか。

「筆談は？」

「え？ ……この子、まだ六歳くらいよ？」

小学校に入る少し前、か。

「でも、他者とのコミュニケーションを取る手段が他にないなら努力するはず」

私は、努力した。動かなくなった表情をカバーできるよう、必死で言葉を学んだ。幻想郷にくる前までは、その努力が功を奏したことがなかったが。

「え、えつとね、そんな、先生もなしにそんなことできる人なんて」
「……それもそうか」

普通の親は文字習得を学校に任せる。その学校に就学する前なら、文字が扱えなくとも無理はない、か。

「そもそも、ノーマは親はいた？」

ノーマは嬉しそうに頷いた。その表情が私の心に刺さる。みんな、親がそばにいるのだろうか。お父さんに、会いたい気持ちが強くなつた。

「あ、あなたはどつなの、溇？」

「母はいない。お父さんは……いないようなもの」

冷静なまま、私は言った。いつものように言葉を濁さなかったのは、あわよくば同情してほしかったからだろう。

「ご、ごめん」

レイセンは、怒られたと思ったのだろうか。もつと愛想良くできればいいのだが。

「いい。……レイセン、地下以外に行つてほしくない場所、ある？」

これ以上話題を続けたくなくて、私は半ば無理に話を切り替えた。

「え？ そうね、一番奥、姫様のお部屋には入らないで欲しいな。」

それから、厨房も避けてほしいかな」

私は頷いた。……姫様、か。頭に湧いた疑問を疑問のままにして、私はレイセンとノーマの横をすれ違うように通り抜けた。

「あ、溇ちゃん」

「何？」

私は振り向いた。レイセンと、不安そうな顔をしたノーマが見えた。

「あなた、人里から来たの？」

私は首を振った。

「私は別の世界から来た、外人」

「そ、それじゃあさ、ノーマと仲良くしてあげてくれない？」

そう言って、レイセンはノーマを私の方へと押し出した。死んだ魚のような目をした彼は、私が近づくとレイセンの方へと下がってしまった。やはり、嫌われた。

「ノーマが私を嫌っている。仲良くすることはできない」

「で、でも」

「それに、コミュニケーション手段を持たない人とは意思疎通が行えない。私はそんな人と友達にはなれない」

そう言くと、レイセンが止める声も聞かずに廊下の奥へと歩き出した。

……レイセンにも嫌われただろう。仕方あるまい。私は私のことを子供らしい子供として扱う人と仲良くなれた試しがない。

「ずいぶん、冷たくあしらうのね」

廊下の奥の、意匠の凝らした襖が開き、中から人が出て来た。この世のものとは思えぬほど美しい女性だった。十二単のような豪華な着物に、床まで届きそうな長い黒髪。この人が、レイセンが言っていた姫様か。私は瞬時に理解した。これほど完成された人に、姫様という呼称以外は似合わない。そんな気さえした。

「姫様。どうされたのですか？」

後ろから、レイセンの戸惑うような声が聞こえた。

「かわいらしい声が聞こえたものだから。子供なんて、久しく見えないわ」

そう言って、姫様は私のそばまで歩いてくる。しゃがんで、私の顔を覗き込む。近づけば近づくほど、姫様の造形の美しさが際立つ。

「あなた、お名前は？」

「私はミオ・マーガトロイド。幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹になった、外人」

私の自己紹介に、姫様はクスリと優雅に微笑んだ。

「ふふふ、面白い子ね。私は蓬萊山輝夜。輝夜でいいわ」

カグヤ。そして、姫様。もしかして、この人は。

「かぐや姫？」

「そう呼ばれたことも、あったわね。何年前かしら」

この人が、かぐや姫。私が唯一知ってる昔話の登場人物。

「あなたの物語を小さい時に聞いて育ちました。お会いできて光栄です」

私は思わず、手を差し出していた。握手……してほしかったのだろっ。

「……ふふっ。大人っぽいと思っていたら、心根はちゃんと、子供なのね」

「おかしいでしょうか」

「いいえ？ とつても、愛らしいわ」

そう言つて、カグヤは私の手を握ってくれた。すべすべで、柔らかくて、冷たい感じがするけど、でも確かに暖かくて。しばらくそうしたあと、私は名残り惜しげに手を離した。

「ありがとうございます。思い出になります」

「気にしないでいいのよ」

私にそう言つて微笑むと、カグヤはレイセンのそばまで歩いた。

「ウドンゲ、その子、まだ声が戻らないのかしら」

ノーマの頭を撫でながら、カグヤは言った。

「はい。会話を交わそうとはしているのですが、どうにも反応が薄くて」

「……会話はもう諦める、というのもそろそろ視野に入れるべきね。今度から筆談を覚えさせて」

カグヤの指示に、レイセンは何も言わずに礼をした。

「それと、てゐは？」

「今薬の材料を取りに竹林に向かつており、ここにはおりません」
「そう……」

カグヤは残念そうに肩を落とした。その様子も美しく、私は惚れ惚れするような気持ちを感じた。

「……わかったわ。レイセン、てみが帰ってきたら私の部屋に寄越して。話があるから」

そう言つてカグヤは歩いて私の方へと向かってくる。きつと、部屋に戻るのだろう。

「そつだ、漣。永遠が欲しかったら私達のところへ来なさいな」

「……永遠？」

「そつ、終わりにき生を、共に楽しみましょう？」

襖を開けて、部屋に戻る寸前、カグヤは私にそんなことを言った。

「……考えておきます」

「ふふ、対応の仕方は立派な大人ね。それじゃあ、よい返事を期待してるわ」

ぱたりと襖が閉じられ、カグヤの姿は見えなくなった。

「綺麗な人」

母よりも綺麗な人というのを、私は初めて見た。

それにしても、永遠？ なんのことだろう。人はいつか死ぬというのに。それとも、あの人は永遠に生きる術を持っているのだろうか。……母のようにならずに済む方法があるのだろうか。

「……漣ちゃん？ 姫様の言うこと、本気にしたらダメだよ？」

レイセンがそばに来て、そんなことを言った。

「なぜ」

「姫様、気まぐれで物を言うから……」

「それでも、死なずに済む方法があるのなら」

私は、永遠を求めるのだろうか。ずっと、ずっと生き続けるのだろうか。

レイセン、あなたなら……どうする？

「漣！ 次行くわよ！」

そうレイセンに聞こうとしたとき、レイセンの後ろの方にあった襖が開き、アリスが出て来た。

「アリスお姉ちゃん」

「そこにいたの。楽しめた？」

私はアリスのそばまで歩いてから、頷く。

「そう？　ここ、なんにもないでしょ？」

「かぐや姫がいた。それだけで十分」

「かぐや姫？　……ああ、輝夜のことね。まあ、子供にとつちや馴染み深いか……」

アリスはそう言うと、私の手を握った。

「さ、行きましょ。パジャマは私の家に運んでもらえる手はずだから、安心していいわ。靴も、くれるみたい」

そう言っつて、アリスは手元の鞆から小さな、私の足に合いそうなサンダルのような靴を取り出した。

「レイセン、澪が世話になったみたいね」

アリスが歩くと、レイセンもついてきた。玄関先まで送ってくれるのだろうか。

「いえ。しっかりとした子供さんですね」

「ホントよ。というか澪が昔話を知ってたことが驚きよ。難しい本ばかり読んでるイメージだったわ」

私は首を振る。

「難しい本は楽しくないから嫌い」

「正直なところも、子供らしいのね」

「らしいも何も、私は子供だ。一人では何もできない未熟な存在だ。これから、どちらへ？」

「まあ、閻魔のところを予定してるけど、今日は無理ね。澪も疲れたでしょうし、今からあいつのところ行ってたら日がくれても帰れないわ」

玄関までたどり着くと、アリスは私の前に靴を置いてくれる。

「ありがとうアリス」

「これくらい気にしないで」

私は置かれた靴に足を入れた。少し大きいけど、問題なく歩ける。

さつきまでとははるかに違つ。アリスも同じように靴を履くと、玄関の引き戸を引いた。

外には竹の林が生えており、ここを抜けることができるのだろうか、そんな不安に駆られる。

「じゃあね、麗仙。永琳によろしく言つといて」

「はい、それでは」

アリスは私の不安に構わず、竹林に入つて行く。

大人の外来人と私

麗仙が小さくなって、永遠亭が見えなくなるころには、私はすっかり方向を見失ってしまっていた。

「だ、大丈夫なの、アリス」

「大丈夫よ」

同じような景色が延々と続くところが、少し怖い。

アリスにくつついてしばらく歩いていると、男の人を連れた女の人が視界に入った。

男の人はスーツを着ていて、小さな鞆を下げていた。日本だったら違和感ないのだろうけど、こんな竹林じゃ不審人物に見えてしまう。

女の人は白い長髪に、頭に大きなリボンをつけていた。白い上着に赤いオーバーオールのようなズボン。赤い瞳をしていたため、私は彼女が吸血鬼ではないかと思った。

「ん、アリスか。永遠亭の帰りか」

けど、彼女には恐怖を感じない。むしろ暖かい人柄ではないかと想像した。

「ええ、元気みたいね、妹紅。そっちは外人？」

「まあな。その子もか？」

「そんなところ」

軽く挨拶を交わすと、二人はお互いが連れてる人物が気になったらしく、すれ違う寸前で止まった。

「……よ。私は藤原妹紅。そっちは？」

「私はミオ・マーガトロイドです」

「一応、うちの妹。そっちの中年は？」

アリスが聞くと、モコウという女性は後ろのスーツ姿の男性に目配せした。

「私は東野康介」

そう自己紹介した彼の声は、上ずっていた。

「だから、康介、無理して気張るなって」

「黙ってくれ。早く帰してくれ。仕事があるんだ」

気を遣ってくれたモコウに、東野は冷たくそう言った。

「あなた随分冷たいのね」

アリスも私と同じことを思っていたようだった。

アリスの言葉に、東野はさらに言った。

「君には関係ないだろう。それに、言葉遣いに気をつけたらどうだ？ 私はこれでも、社員五千人を抱える会社の代表取締役だぞ？」

この人、そんな上の役職の人なんだ。少し私は感心した。

「何？ 暗号？」

「こいつずっとこんな調子なんだよ。どっかから電波受け取ってんのか、とか本気で思ってたよ。今から永琳んところに行くつもりだったんだ」

もしかしてモコウは、東野が病気だとも思っているのだろうか。その可能性は否定できないが、訂正はしておいた方がいいだろう。

「モコウさん」

「ん？」

「代表取締役というのは、日本のとある会社形態で上位に位置する役職」

「へえ、偉いさんだったのか、あんた」

モコウが感心したように東野を見ると、彼は偉そうに胸を張った。「ようやく理解してくれたか。にしても君、小さいのに物知りだね。偉いぞ」

そう言って、東野は私の頭を撫でようとした。ふと、背中に悪寒が走った。

「ありがとございます。お気持ちはありがたいのですが、あなたの手に恐怖を感じるの、撫でるのをやめてください」

私は一歩下がった。東野はピクリと動きを止めた。なぜだろうか、この人の手がとてつもなく怖かった。

「あはははは！　なんだこのガキ！　面白い拾いもんしたな、アリス！　いやあ、愉快愉快」

残念だったな、と言ってモコウは東野の肩を叩いた。彼は顔を赤くしてその手を振り払った。

「黙れ！　なんだこの子供は！　アリスと言ったか、一体どんな教育をしてるんだ！」

「いや、私に言われても」

「私は外来人です。アリスはここに居る間だけ、家族になってくれると言ってくれました。アリスを責めないで」

私が言うと、東野はう、と言葉を詰まらせた。

「……君は何を考えてそう大人をからかうような事を言うんだ？」

「からかうなど。私は私の思ったことを伝えただけです。悪意はありません」

「何をバカな！　子供がそんな口を聞くときはな！　大人をバカにしてる時だと決まっているんだ！　もっと子供らしく話せないのか！？」

東野の言葉に心がささくれ立った。この人は、私がいた世界にいた大人と同じことを言うのか。私は間違っていない。何も嘘をついていない。

「だけど、私が間違っていると判断されてしまうのだろう、きっといつものように、そういうことにされるのだ。モコウも、アリスも、大人である東野のことを信じて……」

「ちよつと、あなた？　さつきから随分偉そうな口を利いてるけど、ちよつとは落ち着いてモノを考えたらどう？　この子みたいに」

「な、何を。君は、そんな子供の言うことを信じるのか？」

「当たり前。あなたの数倍信用に足るわ」

アリスは、言い切ってくれた。私のことを疑いもせず、信じてくれた。

「ふん。さつきから表情一つ動かさない子供が信用に足る？　血迷つてるとしか思えん」

「……あなた、いくつ？」

「？ 三十五だが」

「無駄に生きたわね」

「何をっ！？」

アリスに、東野が掴みかかろうとした。私はアリスを後ろに引っ張って、代わりに私が前に出た。東野の前に、両手を広げて立ちはだかる。

「アリスお姉ちゃんに、手を出さないでください」

東野は拳を振り上げた格好のまま、動かなかった。しばらくして、拳を下ろした。

「……わかった。行こう、妹紅。こんなやつらと一緒にいたくない」「酷い言い草だな、私の知り合いに。」

……ああ、そうだ、言い忘れてた。私はあんたを永遠亭に送り届けたら帰るんで、あとは一人でなんとかしろよ」

永遠亭の方に足を向けた東野が、驚いたようにモコウに顔を向けた。

「何驚いてんの？」

「い、いや、まさか置いていかれるとは」

「は？ なんで私があんたと行動一緒にしなきゃいけないんだよ」「そついうと、東野は私を指さした。」

「そいつだって外来人だろう？ 外来人は保護するべきではないのか！？」

モコウは呆れたように肩を落とした。

「あのな。お前……。いや、違う世界で子供も大人もないわな。」

まあ、あれだ。さっきまで持論展開してたじゃん」

「あ、ああ」

「あれが気に食わないんで、一緒に行動できない。理解したか？」
「そんな、と東野は呟いた。鬼のような形相になって、私に向かってきた。」

「……」

「いい、私一人で大丈夫だよ、アリスお姉ちゃん」

武器を持った人形を取り出したアリスを、私は手で制した。殺させるわけにはいかない。

私のところに向かってくる東野は、私の胸ぐらを掴んで、吊り上げた。苦しくて、息がつまる。

「お前のせいで、私はこの得体の知れない場所で一人になってしまった！ どうしてくれる!？」

「私のせいじゃない。あなた自身の責任」
「何だと!？」

頬に痛みが。はたかれたのだというのは、いちいち確認しなくともわかった。

また、この人も怒るのか。なぜ、私は大人を怒らせてしまうのだろう。大人達が言うように、私が悪いのだろうか。

「落ち着いて考えてください。あなたが彼女たちなら、どう思うかを」

「なぜお前にそんな偉そうに言われなければならない!」

偉そうに。いつも大人達は言う。偉そうに聞こえてしまうのは、きっと私の丁寧語が間違っているせいだ。

まだまだ、私は勉強し足りない。もつと学ばないと。

「お前が黙っていれば、私は!」

「私はその子がしゃべってくれて嬉しいけどな。危うくバカと一緒に行動するところだった」

モコウの言葉が嬉しいけど、今は少しそれどころではない。

「黙れ! 今私はこいつと話してるんだ!」

胸をさらに締め上げられ、さらに痛みが増す。殺されてしまうのではないだろうか。そんな不安がわずかに生まれた。

「やめてください。話し合いますよ」

「うるさい! 大人の私が、躰けてやるのだ!」

ギリギリと音がして、息がし辛くなる。この体を、壊させるわけにはいかない。

この体は、母にもらった大事なもののに。

それに、傷がついてしまったら、またアリスが心配する。

「お、落ち着いてください。私はあなたに何もしません。悪意もありません」

「無表情で言われても、説得力などない！」

どうすればいいのだろう？

東野の気持ちも理解できないわけではない。この人はきっと、一人になることが怖くて、一人になってしまふ原因を自分に帰結したくないから、私をこうして攻撃しているのだろう。ならば、一人でないことを示してあげれば大人しくなってくれるだろうか。

「あ、あなたは、一人ではありません」

「何を知った風なことを！」

「きつとこの幻想郷には、あなたと気が合う外来人がいるはずですから」

「そのばしのぎの言い訳をするな！ ああ、本当に、お前を見てるとイライラする！」

私は説得を諦めた。私では、言葉が足りなかった。なぜ、私はこつも上手く言葉を運用できないのだろう。

もう、この人は私の言葉を聞かないだろう。全身の力を抜いて、私はただされるがままにされる。少しだけ、楽になる。

見たところ、東野はここにくる前まではごくふつうに働いていたはずだ。今こうして私の胸ぐらをつかみ、そして首がしまっていることに気付かないのも、今まで喧嘩などしたこともなく、加減をしないから。ならば、私が気絶すれば、殺してしまったと思うはずだ。いくらなんでも、その時点で我に帰ってくれるはず。

「……………」

どさりと、私は地面に落ちた。硬い地面にお尻が当たって痛かったけど、首を締められるよりははるかにマシだった。

東野の方を見ると、二体の人形が彼の腕を押さえつけていた。動かしているのは、もちろんアリスだった。

「あなた、人の妹を殺そうとするんじゃないわよ」

「う、うるさい」

「因果応報。死ね」

槍を装備した人形が一体、東野の前までふよふよと浮く。いくら小さいと言っても凶器は凶器。あんなので首なり心臓なりを刺せば、死んでしまっただろう。死なせるわけにはいかない。

なぜか保護しているはずのモコウは見ても振りを見ぬ振りを決め込んでいるし、私がやるしかない。

私は東野と槍人形との間に入って、東野をかばうように両手を広げた。

「どいて」

「殺さないで」

アリスはため息をついた。

「なんでよ？ あなた、後ろの彼に殺されかけたのよ？」

「この人は私を殺せない」

「根拠は？」

私は後ろを振り向いた。東野は私になぜかばうのか理解できないようで、呆然と私のことを見ていた。アリスの方を見て、私は自分が考えていたことを伝える。

「この人は戦闘はおろか殴り合い一つ経験したことがないはず」

「だから？」

「あのまま首を締め続けたところで、私が気絶した時点で殺したと思っただけで手を離す」

「……ま、そうかもね」

アリスはそう言ってくれた。ほっと、私は息をついた。

「でも、そいつ、それでは納得しないみたいよ？」

アリスに言われて、後ろを振り向く。

「私をそんな風に見ていたのか。大人をなめるのも大概にしる」

「……私、あなたを守ろうと」

「うるさい！ お前のようなガキに守られなくても、私は一人でなん

とかなった！ 勝手なマネをするな！」

この人は何を言っているのだろう。何か勝算でもあるのだろうか。私が恐れずに槍人形の前に出てこれているのは、アリスは私を守るために力を振るってくれていると信じているからだ。もしアリスが敵なら、私は全てを投げ出してでも命乞いをするだろう。

この人は、勝つつもりなのだろうか。勝てるつもりなのだろうか。

「……戦うつもりなの？ アリスと？」

「なぜそんな目で見る！ 大人をなめるな！」

「もういいかげんにしろよ、康介」

今まで傍観していたモコウが、ようやく口を開いた。東野はモコウの方を見た。モコウは東野の目を見て、それから嫌味たっぷりに嘲笑った。

「お前、ほんつとに滑稽だな」

「な、何が」

「元の世界でのプライドか？ おーやだやだ。偉いさんになると、自ら命を捨てても守るべきプライドがあるんだねえ」

「何を言っている！？」

東野にまるでとりあわず、モコウは私を見た。

「どいてやれよ」

「でも、どいてしまつたらこの人は死んでしまう」

「別にいいだろ。こいつ、お前の家族か？」

私は首を振った。この人が私の家族かと思うと、吐き気がする。

「じゃあ、ほつとけよ」

「私はもう人の死体を見たくない」

モコウは深くため息をついた。

「気持ちはずげーよくわかる。ホント、痛いくらいにな。

でも、割り切れよ。いや、そりゃ最初は無理だろうよ。でも、一回だけだ。一回、敵が死ぬのを見逃すだけでいいんだよ。な？ 目を閉じて、一歩下がれ。そうすりゃ、お前の敵はいなくなる」

「ここを動いて、そしてこの人が死んだら、私が殺したようなもの」

妙に優しいモコウが気になったが、構わず私は続けた。

「……あのな。殺すのはお前じゃねえ。アリスだ」

「なら、なおさら。私は家族に人を殺して欲しくない」

「お前のためだぞ？」

「それでも」

私はアリスを見た。アリスは呆れ返った様子で私を見た。

「アリスお姉ちゃん、お願い。この人を見逃してあげて」

「……あなたは、それでいいのね全く、お人好しね」

頷く。槍人形と東野を拘束していた人形がアリスの元へと帰って行く。

「だいじょう……」

後ろを振り向くと、東野が私を捕まえようと、両腕を広げていた。それから私は精一杯抵抗しようと思っただけで、身動きを取る前に捕まっていた。腕を首に巻きつけるようにして回されているため、私は動けない。こんな状態では、何もできない。

「ははは、さようならだ康介。ホント、澪に感謝だよ。クズと行動することになりかけた」

モコウの手のひらから、煌々と燃える拳大の火の玉があった。

「ち、近づくな、私に手を出すな！ こ、この娘がどうなってもいいのか！」

「お前、自分が燃え尽きる前に祈る以外の何かができるとも思っ
てんのか？」

モコウは火の玉を東野にぶつけようと、思い切りふりかぶった。

「待って、妹紅」

「なんだよ。お前も澪と同じ考えか？」

「違うわ。万が一にも澪に引火したら、澪が死ぬわ」

「……は？」

アリスは私の能力のことを言っているのだろう。私は知らない振りをするしかない。

「とにかく、澪に全く当てない自信があるなら、やってちょうだい」

「いや、無理だし。髪ちよつと焼いても大丈夫だよな、って言うおもう思ってたんだが」

「女の命に何するつもりだったのよ、全く。で、どうやって始末する？」

アリスとモコウはまるで冗談でも飛ばしあっているような雰囲気でお話する。私は別に構わないのだけど、東野は違うみたい。

「お、お前らふざけるな！ い、いいか！？ 私が逃げるまで手を出すなよ！？」

「とか言ってるけど。……やっぱり私がやるしかないわね。死になさい」

アリス後ろから魔方陣が現れ、そこからいくつもの人形が出てくる。それは全て凶悪な武器で武装されていた。

「アリスお姉ちゃん」

「すぐ助けてあげる。目を閉じて」

……さすがに、連れ去られたら何をされるかわからない。ここは、割り切るしかないのだろうか。

自分の命と東野の命、どちらを優先させるべきだろうか……。

私には、ついに判別がつかなかった。だから、黙った。アリスに任せることを選んだ。アリスの言うとおり、私は目を閉じた。

「よし、よく選んだわ、漣」

ひゅんひゅんと周りに何かが飛ぶ音がする。これで、私は十字架を背負うことになるのだろうか。

そう思っていたら、ぐい、と思い切り首が締まって、振り回されるような感覚がしたあと、お腹に突き刺さるような痛みが走った。

目を開けて、疑問に思う。どういうことだろう。なぜ私は、アリスの人形に刺されているのだろうか。

「は、はははは！ 私ではない、お前が刺したのだ！ こ、これでわかっただろう！ わかったら、私に手を出すな！」

アリスの人形の動きが止まった。そうか、私は盾に使われたのか。なんてふがない。私の存在が、アリスの枷になっている。なぜ、

私ごと攻撃しないのだろう。決心がつかないのだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に構わず」

「……」

アリスは何も言わず呆然と立っていた。なぜ。どうして今、何もしてくれないの。

ゆっくりと、アリスと私の距離が遠ざかる。そして、離れる速度はだんだんと早くなってくる。

「……助けて」

アリスの姿が完全に消える直前、私はアリスの方へと手を伸ばした。

星をつかもうと夜空に手を伸ばしているような気分になった。

アリスはきつと、私を探してくれる。もし切り捨てられたら、その時はその時だ。

連れ去られている最中も、私は考えることをやめない。

どうやって逃げ出すか。力では及ばない。脚力も相手の方が強い。思考力も、何もかもが私の上を行く。そんな大人から、一体どうすれば生き延びられるか。

私はそんなことをかんがえながら、ただ連れ去られるがままに身を任せた。無駄に抵抗して殺されるわけにはいかないのだ。

殺されさえしなければ、生きて帰れさえすれば、それでいい。

私は、必死に逃げ出す東野を見た。

その顔は怯えと恐れに染まっていた。それは、今こうして人質になっっている私の心境と非常に良く似ていた。

壊れた大人と私

竹林の中にあつた小さな洞窟に、東野は入り込んだ。入り口は狭く、入る時に私の服の一部が裂けてしまった。パジャマじゃなくてよかつた、と一瞬だけ思った。

東野は私を洞窟の奥の方に放つた。ゴツゴツとした岩肌にお尻をぶつけた。小さい穴のあいたお腹とお尻が痛いけど、それ以上に、怖かつた。

この洞窟はとても小さく、どんなに大きく見積もつても四畳は超えないだろう。湧き水がどこからか染み出しているらしく、壁の岩は全て濡れていた。土臭い匂いがして、むせそうになる。明かりは東野がいる入り口から注がれる光だけ。

こうして入り口を塞がれては、どうあつても逃げられない。後ろを振り向くと、行き止まりだった。つまり、私はアリスが助けに来るまでこんな狭い場所で東野と二人きり。

「ま、全く。バカな女だ。ははは、私を、誰だと思つてる……」
そう言つと、東野は入り口に座つた。逃がすつもりはないらしい。私はひたすら黙っている。今、私の命を握っているのはこの人。機嫌を損ねて殺される羽目にだけはなりたくなかつた。

「にしても、あの二人、美人だったな。ふふふ……」
彼の頭の中では、一体どんな想像が繰り広げられているのだろう。絶対に知りたくない。

「……お前も、中々。まだまだ子供だが、将来性はある」
「なんの、話をしているの」

品定めするかのような東野の物言いに、私はつい、口を開いてしまった。

「教えてやろうか？」
失敗した。

東野は腰を上げ、私に近づいて来る。目がおかしかった。据わっ

ていて、頬も妙に赤い。スーツのネクタイを緩めると、ゆっくりと私の肩に触れた。

「……わ、私は、まだ子供」

「知ってるよ。大人にしてやるよ」

ダメだ。早くなんとか切り抜けないと、取り返しのつかない事になる。

「近づかないで」

にじり寄ってくる東野は、止まらなかった。

この人はきつと、命の危険が迫って、理性よりも本能の部分が思考の半分以上を占めているのだろう。だから、私のような子供にすら、欲情するのだ。状況判断力も鈍っている。ならば……どうする。何かを言う？ 何を言っても無駄だろう。むしろ、余計に煽るだけかもしれない。

何かをする？ 大人相手に何をしようと。

服を脱がそうと迫ってくる手を見つめながら、私は思考する。

このままあえて、汚される。それならば、あるいは。少なくとも、その間は殺される心配はない。ない、が……。

「この期に及んで、まだ眉一つ動かさないのか？ 何もしないとも思っているのか？ 大人だから、子供を守るものだと、本気で思ってるのか？」

違う。大人は子供を守ろうとはするが私を守ろうとはしない。

「……やめて」

私の服がはだけさせられる。上半身の全てをこの人に晒してしまふのが、気持ち悪い。このまま私は、一生ものの記憶を、植え付けられてしまうのだろうか。そんなのは嫌だ。この男が私の最初で、そして一生残るなど、気持ちが悪くて仕方がないだろう。

「ふん、本当にそう思っているのか？ 嘘の塊だな、お前は」

なんとかしなければ、早くしなければ私は、知りたくもない痛みを刻まれる。

そうだ。私に手を出さなければまだ命だけは助けられるかも、

ということを伝えれば、躊躇してくれるかも。

「し、死にたくないでしょ」

「ん？ ああ、そのことか。もういいんだ」

私は思考を止めてしまった。

「私は、あの二人に殺されるだろう。ここだってどればれずに済むかわからない。だから……」

私は耳を塞ごうとする。私の両手が東野に押さえつけられ、岩肌
に縛り付けられるような格好になる。まるで押し倒されたかのような
感覚だった。向こうももちろん、押し倒してる感覚なのだろう。

「だから、最期にお前の悲鳴を、お前が表情を歪めるところを見て
みたい」

ダメだ、諦めよう。

ここまで強い決意を揺るがすほど強い言葉を私は知らない。私は
言葉を発するのをやめ、全身から力を抜いた。今の私はただの人形
のようなものだ。

抵抗をやめた私を、東野は好き勝手にいじる。下の服に手が伸び
ようとしたとき、東野が凄い勢いで振り向いた。

「な、なんでこんなに早く」

「ここは、私の庭だ。ほら、溲を出せ。今なら命だけなら助けて……」

東野が慌てて私を左手だけで思い切り抱きかかえ、首を掴んだ。

モコウとアリスがショックを受けたように目を見開いているのが見
えた。首が痛くて苦しいけど、もういい。

「……何をした？」

「は、はははははは！」

東野はただ笑った。ついに精神に異常をきたしたのだろうか。

「この娘に大人の恐ろしさを心の底まで刷り込んでやった！ こ
れ以上この娘に何かしてほしくなければ、私が逃げるのを」

「……」

モコウはやれやれと首を振った。それとほぼ同時、肉が焦げる嫌

な匂いがした。その直後、私は解放された。

「ぎゃあああ!？」

「わかってねーな。ほんと、わかってねえよ」

東野の方を見ると、彼の右手が炎に包まれていた。それはやがて、腕全体に燃え広がっていく。

「もうお前、死ぬしかねえよ」

苦しそうに叫ぶ東野の叫びが、耳に障る。

「漣!」

アリスに抱きしめられて、東野から引き離してくれた。東野に付いた炎は全身に広がり、彼の全てを焼き尽くそうとした。

「ま、待ってモコウ」

私は彼女を止めようと口を開いた。

「ダメだ。こいつは燃やす」

「殺さないで」

「アリス。先永遠亭に行ってる。あんまりこういうのガキに見せんな」

私の言葉は、届かなかった。

でも、届いてくれなくてよかった、と思う私もいた。

「わかった」

アリスは私を抱きしめたまま、空を飛んだ。浮遊感が少し嫌だったけど、アリスに抱き締めてもらえて、凄く安心する。

「大丈夫よ、漣。永琳はすごく優秀な医者だから、何も心配はいらないわ。大丈夫」

「……ありがとう、アリス」

疲れた。久しぶりに悪い大人に攫われたから、妙に体力を消費した。何も感じなければ、こんな風に思うこともないのだけれど。なんとかして感じずにいる方法はないだろうか。

「ちよつと眠るね。疲れちゃった」

「ええ。ゆっくり眠りなさい」

アリスに了解をもらうと、私は目を閉じた。

意識がおちる寸前まで、迫る大きな手と、東野が燃える姿が瞼の裏に浮かんで離れなかった。

古い記憶と私

目が覚めると、アリスの顔があった。心配そうな表情になっていた顔は、私が目を開けたことで嬉しそうな表情に変わった。

「おはよ、漣。気分はどう？」

「おはよう、アリスお姉ちゃん。身体的には問題ないと思う」

お腹をさすってみたが、痛みは感じなかった。真新しくなっている入院服を捲り上げてお腹を見ると、傷一つなかった。

「エイリンは？」

「ここは私の家よ。傷が完治したんで、帰ってきたの」

そういえば、ここは永遠亭とはかなり作りが違う。全体的に木製だし、壁の上の棚やベッドの小物入れのところには大小様々な人形が大量に置かれていた。

「そう」

私は体を起こした。アリスが優しく手で体を支えてくれようとするけど、私は首を振った。ありがたいけど、自分でできることはする。

「……ごめんね、漣」

「何が？」

私は首を傾げた。何か私は、アリスに謝られるようなことをされただろうか。

「その、お腹、刺しちゃって」

「そのこと。気にしないで。悪いのは、アリスお姉ちゃんじゃないよ」

東野は……死んだのだろう。私は一つの命を見殺しにした。そして、彼が死んでよかったと思う自分が、許せない。

「……ありがとう、漣。その、それからね、あなたが東野にされたことなんだけど……」

あわあわと言いにくそうに、アリスは切り出した。そういえば、

私は東野に汚されたことになっていたのだったか。なぜ彼はあんなことを言ったのだろうか。

……死にたかったのだろうか。よくわからない。

「その、あれは……」

「知ってるよ、大丈夫」

「大丈夫って……」

「何もされなかったから」

私は真実をアリスに告げた。アリスはぼかんとして、聞き返してきた。

「な、何も？ でも、あいつは……」

「最後の彼は様子がおかしかった。……でも、間一髪だったのは事実。本当にありがとう、アリス。あなたのおかげで、痛みを知らずに済んだ」

もし、あのままアリスの助けが来なかったら、私はどうなっていたのだろうか。体は壊れ、心も狂い、私は私でなくなってしまったのだろうか。そんな恐れが体を包む。

「そ、そんな。気にしないで。そうか、よかった。まだだったんだ。間に合ったんだ、私は……」

そう呟くように言うと、アリスは私の方に近寄って、両手を広げて抱きしめようとする。

「……」

一瞬だけ後ろにさがろうとして、なんとか自分を押さえる。

アリスは敵じゃない。

そう自分に言い聞かせる。やはり、私の中で東野に襲われたことは大きい事のようにだ。警戒心が変に強まっている。

「本当に、よかった、無事で……」

ゆっくりと、私は抱き締められた。東野にされたみたいに乱暴ではなく、まるでコワレモノにでも触るかのようだった。

おずおすと、私も抱き締め返す。

「……ありがとう、アリスお姉ちゃん」

しばらく、私たちはそうして抱き合っていた。温かくて、やらわらかくて。ずっとこうしていたいような感覚がしてくる。

「漣、私はもう失敗しないから。今度はちゃんと守るから、安心して」

アリスは私から離れて、私の目をしっかりと見てそう言った。

「うん」

私は素直に頷いた。

「ふふ、素直ね。……ふああ」

安心したのか、アリスは手で口をおおい、大きなあくびをした。

「眠いの、アリスお姉ちゃん？」

「ん、まあね。普段なら寝てる時間だから」

私は周りを見回して、時計を探す。いくら探しても、時計らしきものはこの部屋に一切なかった。

「ああ、正確な時間は知らないわ。日が落ちてからどれくらい経ったか感覚で判断してるだけだからね」

「時計なくて、不便じゃない？」

アリスは小さく笑った。

「ぜんぜん。そもそも私時計がいるほど正確な時間必要としてないし」

そんな人がいるのか。私は驚いた。

でも、確かに学校や仕事など、正確な時間が必要である場所に所属していなければ、正確な時間はなくても生活に困らない……のだろうか。

「じゃ、私寝るから、もうちょいスペース空けて」

「え、うん」

私はそう言われて、アリスがいる方とは反対側に少し移動する。

アリスは部屋の明かりを指を鳴らすだけで消すと、私の隣で横になった。ベッドは確かに広めだけど、まさか一緒に寝るなんて思いもしなかった。

「アリス、私床で寝る」

「気にしないの、ほら布団」

「あ、ありがとう」

アリスに掛け布団を被せてもらう。

アリスに迷惑ではないだろうか。やはり、どいた方がいいのだろうか。

違う。私は自身で自分の考えを否定した。

私は怖いのだ。誰かと同衾することが、何をされるのか、何があるのか、どうなるのか、わからなくて、怖いのだ。

アリスは女性だ。そんなことはわかっている。それでも、私は記憶の中の誰かとアリスを重ねてしまう。そんなのは、絶対に嫌だった。

「あ、アリスお姉ちゃん、怖い」

「どうしたの？」

「ごめん、アリスお姉ちゃん。ごめんなさい。私、誰かと一緒に眠るのが怖い」

抱きしめようとしてくれたアリスの手が止まった。

「……詳しく、話を聞かせてもらってもいい？」

頷いて、私は口を開く。誤解されてはいけない。アリスが嫌いだから一緒に眠れない、だなんて思われてはいけない。

「私、あまりよく憶えてないのだけれど、何かがあつたみたいで、何故か、誰かと一緒に眠ると怖くて怖くて仕方がなくなるの。アリスお姉ちゃんのことを嫌いなんじゃないの。大好きだから、嫌いたくないの。それだけはわかって。お願い」

私は精一杯、言葉を尽くした。嘘は何一つ言っていない。信じてくれるだろうか。

「そうなの。……それは、ごめんね。わかったわ、あなたがここで眠りなさい」

「でも、ここはアリスお姉ちゃんの家だし」

「いいのよ。何かあつたら、呼びなさい」

私が止めるのも構わず、アリスは立ち上がって部屋を出て行って

しまった。

……嫌われたかな。一人で布団をひつかぶり、目を閉じる。
アリス、ごめん。大好き。

私は眠りに就いた。それから、夢を見た。

元いた世界の夢だった。

今と同じように、私が眠っている。その隣に、美しい女性……母
と一緒に眠っていた。

「ねえ、漣」

「なあに、ママ」

そうだ、この時の私はまだ無知で、滅多に帰ってこないお父さんと優しくて美人の母の言うことを聞いていれば全てうまくいくと、心の底から信じていた。母も、お父さんも、滅多なことでは話しかけてすらくれなかつたけど、そう思っていた。

「あなたは、私と一緒にいたい？」

「うん！ ずっと、ずっと一緒にいたい！」

「そう……」

ああ、思い出した。この夢は、あの時の記憶だ。忘れていた、私の過去の夢だ。なぜ今更思い出してしまうのだろうか。

「じゃあ、一緒に行きましょう？」

「どこへ？ おでかけ？」

母が頷くのが見えた。電気が消されて、母が何をしようとしているのかがよく見えない。

「とつても、いいところよ」

「！」

この時の私は、息が詰まるのを感じていた。今なら、紐で首を締められているということがわかっただろうに。

「な、なに、を……かはつ。何をするの、ママ？ やめてよお……」

「大丈夫よ、漣。すぐ楽になるから」

あの時は、何を言われているのか理解できなかった。どんどん紐

に込める力が強くなる。意識がぶつりと切れかけたあたりで、ようやく私は殺されようとしていることを理解したのだったか。

「……い、いや……助けて、やめて、ママ……」

「大丈夫、大丈夫よ。何も心配はいらないわ。すぐにママもいくからね。ずっと、ずっと一緒よ」

確か、必死で助かろうともがいた記憶がある。首に手を当てて、紐を外そうとするのだけど、できなかつたことを思い出した。

ああ、そうだった。この時の母は、私を殺そうとする時に細いワイヤーを使ったのだった。我が母ながら、残酷なことを。

「……い、嫌、死にたくないよお……！」

「！」

この時初めて、私の必死の懇願が届いた。ワイヤーから力が抜け、私はようやく新鮮な空気を吸うことができた。

「ごほっ、がほっ！ ま、ママ……。うわああん！」

私が号泣している隣で、母は自分がしようとしていたことに気付いたらしく、自分の手を見つめてわなわなと震えていた。

「……漣」

泣いてる私に構わず、母はどこかへ行ってしまった。しばらくすると私は泣き疲れて眠ってしまった。どこかへ行った母を追おうとはしなかった。

そして、次の日の朝、目が覚めて、全てを忘れていた私は、いつものようにリビングへ行き……。

吊り下がって揺れる母を見つけた。

「！」

私は飛び起きた。そうか。

私がアリスと眠ることを恐怖したのは、母と重ねてしまったからか。

にしても、今日の夢で様々なことを思い出せた。疑問も、同時に湧いてきた。

なぜ母は私と心中しようとしたのだろう。

……考えても詮無いことだ。考えても、気が滅入るだけ。もう一度眠ろう。そうすれば、幸せな夢が見れるだろう。

それから朝まで、私の意識が途切れることはなかった。

二日目の朝と私

眠い。仕方あるまい、と自分を諫める。

「入るわよ、漣」

「どうぞ」

アリスは入ってくるなり驚いた。

「……目充血してるわよ？」

「眠れなかった。おはよう、アリスお姉ちゃん」

私はベッドから降りて、昨日エイリンにもらった靴を履いてそういった。誰かに朝起きておはようと言えたのは、随分久しぶりだった。

「あ、おはよう。眠れなかったって、どうして？」

「夢を見た」

「どんな夢？」

私はアリスのそばまで行くと、アリスを見上げた。昨日と似たような模様の服の上から、エプロンをつけている。料理していたのだろう。

「隣で眠っていた母に殺されかける夢」

「……そう。それは怖い夢ね」

「夢だとよかったのだけれど」

「え？」

なんでもない、と私は首を振った。

「ふうん……。今ご飯できたんだけど、眠いなら寝とく？」

「いい。朝寝坊の癖がついたら困る」

たとえサボリ気味とはいえ、学校に通っているのだ、早起きの習慣はなくしたくない。

「そ、そう。ほんと、しっかりしてるわね。こっちに朝ごはん用意してるから」

「ありがとう、アリスお姉ちゃん」

隣の部屋に移動したアリスについて歩く。

本当にご飯までくれるのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。私に何かできることはないだろうか。小間使いの代わりくらいなら、できるだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に何かできることはない？」

「ん？ ……そうね、じゃお皿洗い頼んでもいいかしら」

「もちろん」

私は頷いた。家事くらいなら、私でもできる。掃除、洗濯、買い物に料理に。ここに来るまでは全部一人でやっていたのだ。

「じゃ、ご飯食べてお皿洗いしてもらったら、今日も行きましようか」

「うん」

アリスは、すでに料理が乗っているテーブルについた。私もアリスの向かい側に座る。木製の皿に、スープのような白い液体が入っている。これが朝食だろうか。アリスが食べ始めるのを見てから、私も食べ始める。

「いただきます」

「……ねえ」

私がスプーンを持ってスープを飲もうとしたところで、アリスが声をかけてきた。何かしてはいけないことでもしたのだろうか。

「ちょっと気になったんだけど、その『いただきます』って何？」

言われて、初めて気づく。そういえば、アリスは食事の前に何も挨拶をしていなかった。この世界では食前に挨拶をする習慣がないのだろうか。もしくは、アリスにその習慣がないか。

「挨拶。意味は知らないけど」

「ふうん」

アリスはそう言うと、小さくいただきますと言った。

「これでいいのかしら」
頷く。

私は食事を始める。何の料理か聞きたいのだけれど、食材を知っ

たせいで食欲が失せるということが往々にしてあるので、知らないまま口に運ぶ。毒ではないはずなので、知らなくても大丈夫……なはず。

口に含んでしばらく味わう。人肌程度の温度なので、舌が火傷するなんてことはなかった。甘い香りととろとろとした食感で、味も良好。とてもおいしい。シチューではないだろうか、と予想する。

「すごくおいしい」

「お口にあってなによりだわ」

何の料理だろうか。キノコが多めに入っているから、キノコシチュー……なのだろうか。

「何の料理？ 帰ってから作ってみたい」

「あなた料理できるの？」

「一通りは」

「すごいわね」

アリスは感心してくれた。必要に迫られて覚えた事だったが、こうして褒めてくれるのなら、覚えてよかったと思える。

「これはキノコシチューよ。いっぱい作ったから、少なくとも今日はずっとこれだからね」

「わかった」

これが三食か。目の前に出されている分だけだと、昨日一切の物を口にしていない身としては物足りない気もするが、食べられるだけで幸せなことなのだ。我慢しよう。

「おかわり、してもいいのよ？」

「……いい」

「迷うくらいだったらすれればいいのに。変に遠慮しすぎよ」

私は首を振った。

「これ以上食べたなら、お腹を攻撃された時に吐いてしまうかもしれない」

「攻撃されること前提で物を考えないですよ。……ここ、そんなに危険じゃないから」

そうは言われても、昨日は二人もの人間に襲われた。チルノという氷精を名乗る子供と、東野の二人だ。元の世界でも、一日に二回も襲われることはなかった。

「……ごめん、アリスお姉ちゃん。それでも、私は警戒してしまう」
私がそう言くと、アリスは残念そうに肩を落とした。

「まあ、信じろっていう方が無茶よね。でも、お腹空くわよ?」

「満腹で動けなくなるよりかはマシ」

「ホント、普通の子供とは真逆に考えるのね」

そう言ってアリスは笑った。嘲笑でないことは、アリスの顔を見ればわかった。

「……話を変えるけど、今日はどこへ行くの?」

少し気になって、聞いてみた。

「ん、昨日も通った魔法の森を抜けて、再思の道を越えて、三途の川を渡って、それから裁判所の閻魔に会いに行くわよ」

私は空いた口が塞がらなかった。その行程にはかなりの無理があるようにしか思えなかったからだ。

「え、し、死ぬの?」

「は? ……あつ、そういえば、そうだったわね。ごめんごめん、勘違いさせたわね」

少し逃げるかどうかを考え始めていた私に、アリスは手を振って否定した。

「え?」

「幻想郷じゃあね、閻魔大王は別に死ななくても会えるのよ」

「……」

会いたくない。閻魔様に会ったら、私はきっと舌を抜かれてしまう。ただでさえ他人よりコミュニケーション手段が少ないのに、言葉まで奪われたら、私は……。

「何心配してるの?」

「え? 舌を抜かれないか……」

私がそう言くと、アリスは大笑いした。

「あはははは！ 大丈夫よ、漣。その閻魔ルールには厳しいけど、生きてる人に何かする、なんてことないから！ にしても、あなたもそんな面があったのね」

「なんだかバカにされてるみたいで、むっとする。

「変？」

「いいや、とつても可愛いわ」

「……」

「なんだか、もうどうでもよくなった。可愛い、か。初めて言ってもらえたな。嬉しい。」

「ご馳走様でした」

キノコシチューを食べ終わると、私は両手を合わせて礼をした。

「それも挨拶？」

頷く。私よりも先に食べ終わったアリスは、遅めではあるが手をあわせ、ぎこちなくご馳走様をした。

「……毎日こんなやつてるの？」

「うん。毎日、毎食」

アリスは煩わしそうな顔をした。

「へえ。面倒なのね、外の世界って。前に来た外来人もやってけど、あいつが特殊なんじゃなくて、外で習慣付いてんのね」

アリスの言葉に、少し気になるところはあった。私の前にアリスのところに来た、外来人。……昨日、レイムはアリスが連れて来た外来人が何かを企てているということを知っていた。もしかして……。

想像だけで物を考えていた私は、かぶりを振って思考をやめた。

「決めつけで考えてはダメ。」

「どうしたの？」

「え、えっと、シャワー浴びていい？ 浴びたくなっちゃって」

「多少無理のある言い訳とは思ったが、アリスは不審に思うことはなかった。」

「そう？ その扉を出て右がバスルームよ」

「わかった。浴びて来る」

私は椅子から降りると、言われた通りにバスルームに向かう。

脱衣所も湯船も木製で、そうでないのはシャワーヘッドくらいだった。

脱衣所でパジャマと下着を脱いで裸になると、私はバスルームに入った。バスルームと脱衣所を仕切る扉を占めると、私は驚いた。

ここは森のど真ん中、電気も水も来ているはずがないのに、最新式の電子パネルが備え付けられてあった。

どういう原理なんだろうと思いつながら、ありがたいので使わせてもらう。熱いシャワーを浴びて、体を洗う。昨日東野に触られたところは、念入りに洗った。

「溼。サイズが合うかどうかわからないけど、私がか子供の時の服貸してあげる。ここにタオルと一緒に置いておくから」

最後に髪を洗い終わったところで、見計らったようにアリスがそう言ってきた。

「え？ あ、ありがとうアリスお姉ちゃん」

またパジャマを着るつもりだった私にしたら、それは嬉しい驚きだった。

……でも、いいんだろうか、こんなに色々してもらって。

バスルームを出ると、アリスの言っていたとおりに、タオルの下に着古したような服が置いてあった。下着も一緒だったのは、素直に嬉しかった。お古だとかそういうことは、気にならなかった。

最初私は幻想郷にいる間パジャマと同じく下着をずっと着るしかないと思っていたのだ。まさか、こうして服を着替えることができるなんて。

アリスに渡された服を着て、洗面所にあった鏡を見た。黒い長い髪と、黒い瞳、全く動かない表情をして立っている私は、アリスが今着ている服をそのまま小さくしたような服を着ていた。

なんだか本当にアリスの妹になったようで、とても嬉しかった。

「アリスお姉ちゃん、お待たせ。アリスお姉ちゃんは浴びなくてい

いの？」

大きめのバスケットのような鞆を下げ、出かける準備を終えたアリスに私は聞いた。

「まあね。夜浴びるわ。何か持ち物……なんて、なかったわね。じゃ、準備はいい？」

うん。私は頷いた。

「じゃ、行きましょうか」

自然な動作で手を握ってくれて、さらに私はアリスと家族になったかのような錯覚した。

家を出て、森を歩く。靴があるのとないのとは、大きな違いなのだということを実感した。

幻想郷に来て二日目の生活が始まった。

裁判所までの道のりと私

昨日と同じように森に行く。硬い土を踏みしめ、木々を越えて、アリスは迷わず進んで行く。

「ねえ、アリスお姉ちゃんは どうして方角がわかるの？」

「え、方角？ ……ううん、方角はわからないわ」

私は首をかしげた。方角もわからずに、どうして進めているのだろうか。

「ここら辺は私、よく来てるから。もう道を憶えたわ。それだけよ」

「へえ〜」

それだけでも、できるだけすごい。

「ふふ、あなたも見知った道なら地図いらないでしょ？」

「そうだね。それと同じかな」

アリスは頷いた。

「じゃあさ、その再思の道ってどれくらいでつくの？」

私の質問に、アリスはしばらく黙った。

「そうね、だいたい……。日が登り切る前には着くわ。そんなに遠くないわ」

正確な時間は教えてもらえなかったが、わからないのはアリスも同じだろう。

「そうなんだ。ありがとうアリスお姉ちゃん」

私たちはそれからしばらく黙って森を歩く。

昨日、聞きそびれたことがあったのをひとつ、思い出した。しかし、聞いてもいいのかどうか、悩む。

私の手を握りながら歩くアリスを見上げる。綺麗で、優しくて強い私のお姉ちゃん。嫌われたくないし、嫌いたくないのだけれど。

「ねえ、アリスお姉ちゃん。一つだけ、聞いていい？」

「いいわよ」

「東野、どうなったの？」

アリスは黙った。目を閉じて、何かを考えている。

「……漣。あなたは優しい子よ」

「え、あ、うん、ありがとう」

優しくなんか無い。私は、東野に死んでいてほしい、って思うよ
うな悪い子なのだ。優しいなんて、間違った評価だ。

「だから、言うけど。」

「……東野は、死んでないわ」

私が驚いたのは、嬉しかったからか、怖かったからか。わからな
かった。

「え？」

「そりゃ、酷いことされかけた漣からしたらあいつが生きてるのは
居心地悪いかもしれないけど、大丈夫よ。あいつ、二度と悪さでき
ないから」

そうは言われても、不安ではある。また、襲って来たら。今度、
私は助かることができるのか。最後の最後、彼は私に興味を持って
いた。もしかしたら、というのもあるかもしれない。

「……どうしても、っていうなら、妹紅のところに私が出向いて、
その」

「いい。……私は大丈夫。東野が生きていても、気にしない」

私は言いにくそうに言葉を濁すアリスに無理をして言った。本当
なら、殺してと言っってしまった。でも、それをすればそれこ
そ本当に私は十字架を背負ってしまうことになる。そうなれば間違
いなく、東野は私の中でずっと残り続けるだろう。そんなのは、ご
めんだった。

「そう。ありがとうね、漣」

「教えてくれてありがとう、アリスお姉ちゃん」

私は精一杯の感謝を込めてそう言った。表情が動いたのなら、ど
んな顔になっているだろうか。

「ねえ、再思の道ってどんなところなの？」

「三途の川と地獄を結ぶ長い道よ」

「ふうん」

三途の川、か。渡っていたら死んでしまったりして。

……いや、あるいは、もう私は死んでいるのかも。アリスはちょっと変わった死神で、私に同情してしまい、こうして家族ごっこを続けている。本当なら、巨大な鎌で私の魂を刈り取らなければならぬというのに……。

そんなストーリーが頭に浮かんだ。

「ねえ、アリスお姉ちゃん」

「ん？」

「私、実は死んでて、ここはあの世、つてことはない？」

アリスは否定も肯定もなかった。なぜだろう。

「……なんとも言えないわね」

「どうして？」

「前に、自分が死んでた事に気付かずここに来た人がいたことがあったから……」

私も、そんな人間の可能性がある、ということか。

死んだと気付かず、存在しない体を守るため、必死になる人間は、さぞかし滑稽だろう。笑い話にすらなるかもしれない。

「アリスお姉ちゃんは、どう思う？」

「あなたなは生きてるわ。保証する」

アリスの言葉がきっかけで、私は思い出した。……よく考えたら、私は足を切ったり腹を貫かれたりしたではないか。痛みも感じた。それは何よりの、生きている証拠であろう。……痛みを感じたことを喜ぶなど、変な私。

「そう？　なら、信じる」

私の中ではもう結論が出ていたけれど、そう言った。このことだけじゃなくて、私がアリスに何かを騙されている可能性は、否定しきれないけど。

……まあ、別にアリスになら、騙されてもかまわない。割と本気でそう思う。

「ふふ、とっても嬉しいわ」

アリスは笑ってくれた。私に本当の姉がいたら、こんな感じなのだろうか。

「ねえ、アリスお姉ちゃんには、妹いる？」

「ん？ あなたがいるわ」

「本当の妹」

アリスは寂しそうに首を振った。

「いないわ。……そういえば、ちょっと気になったことがあって」

「何？ なんでも答えるよ」

こちらからばかり聞くのもどうかと思っていた矢先、アリスがそう言ってくれた。

「あなた、普段は……どうやって生活してるの？」

「……普通に」

「でも、ご両親二人ともいないんでしょう？」

昨日も交わしたような質問だった。私は昨日はぐらかすような答え方をした。しかし、今は違う。今は、ちゃんと答える。

「ううん。母がいないだけで、お父さんはまだ生きてる」

「え？ ……でも、昨日は」

「昨日は、お父さんは病院に連れて行ってはくれないという意味」
後付けだけど、嘘をつけていました、よりは遥かにマシだと判断した。

「……ふふふ。隠さなくても大丈夫よ。昨日はまだ、警戒してたんでしょ？」

「アリスお姉ちゃん。私は、あなたのことが嫌いなんじゃなくて」

「わかってるわ」

必死で言い訳をし始めた私に、アリスは微笑んでくれた。

「警戒心があるのは悪いことじゃないわ。出会ってばかりの人に家庭の事情を話せ、っていう方が無理よ。だから、気にしなくていいわ」

そう言ってもらえて、私は安心した。

「ごめん、アリスお姉ちゃん。でも、今度はちゃんと話すから」

「辛いのを無理に話さなくていいのよ？」

大丈夫。私はそう言っつて、何から話すかを頭の中で整理してから、口を開いた。

「私のお父さんは、物凄く偉くて、物凄く働いてて、物凄く稼いで、私にたくさんのお金を贈っつてくれるの。」

お父さんは、いないのと同じもの。でも、世界で一番愛してる。

きつと私は、お父さんがいるから、元いた世界に帰りたいんだと思っつ

「お金つて……。もつと他にあるでしょ？」

「ない。でもいい。」

お金が、私とお父さんとの愛の証。見えない、あやふやなものでなく、愛を形にしてる。毎月、お父さんはたくさんのお金を贈っつてくれる。一度計算してみたけど、毎日山のように食べて、遊び倒してもまだ余るくらいにお金をくれる」

「いや、お金のことはもういいから、他の」

「それが、お父さんが私を想っつてくれているという証拠。だから私は、お父さんの愛を無くしたくないから、ギリギリで生活していた。

毎日、五百円に食費を抑える。光熱費、水道代、削れる所は全部削っつて、お父さんの『愛』を残せるだけ残す。いつか、数えきれないくらいに『愛情』を集めて、会いに来てくれたお父さんにどれだけ私がお父さんを愛したか、わかつつてもらっつ。きつとそうすれば、お父さんだつて私と一緒に暮らしてくれる」

「いや、あのね、漣」

「お父さんは私のことを愛してくれてる……。はずだと思っつ。一緒に暮らしてくれないのは、きつと母を思い出してしまうから。だから、きつといつか、私を認めてくれれば、多分、一緒に暮らしてくれるはず」

「漣」

話し終わつた私に、アリスが話しかけてくれた。

「……あなたの想いはよくわかったわ」

「わかつてくれた？」

私はうれしくなる。やっと、私達の愛を理解してくれる人が現れた。やっぱり、アリスは優しいな。

「ええ。ごめんなさい。私、気付いてあげれなかった。あなたは、まだまだ、子供だったのにな」

「私は、一度も大人になったことないよ」

「ごめんなさいね、漣。元の世界に帰れば、あなたは、暖かいご飯が用意してあって、ご両親が迎えてくれると勝手に思ってた。だから、今こそ言うわね」

アリスが、私の手をしっかりと、握りしめてくれる。

「私とずっと……いえダメ、まだ、速いか……。帰りたくなかったら、言いなさい」

「え？」

「だから、もし元の世界に帰りたくなかったら、私に言いなさい」
アリスは奇妙なことを言った。

「なんで？ 私、絶対に帰るよ？」

そう私が断言すると、アリスは残念そうに首を振って、小さく、本当に小さく何かを呟いた。

「こんな家庭で育って歪まないはずがないじゃない。……なんで気付かなかったのよ、私のバカ」

私には聞こえなかったけど、アリスの顔は悔しそうだった。

「どうしたの、アリスお姉ちゃん」

「なんでもないわ。……さ、もうすぐ森を抜けるわよ」

森の木々が晴れ、私の視界は一気に広がった。地平線の向こうまで続く長い道の周りを、赤々しい彼岸花が咲き誇っている。そんな道を、私とアリスは行く。

「ここが、再思の道？」

アリスは頷いた。ここまで綺麗な道を歩くのはどこか気が引ける。
「ええ。ここは本来、死にたがりを思い直させるための道なのよ」

「……………」
死にたがり……。自殺志願者か。気持ちはわからなくもないが、ある命を自ら捨てるというのはやはり、理解に苦しむ。

「あなたは？」

「？」

「あなたは、死にたい？」

アリスは奇妙なことを聞いてきた。

私は首を振って答えた。私が、死を望んでいる？ あり得ない。

「そ、そう。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスは慌ててそんなことを言った。

「アリスお姉ちゃんは？」

「え」

「アリスお姉ちゃんは、死にたいって思ったこと、ある？」

アリスは否定も肯定もしなかった。なぜだろう。

「……………興味ある？」

「何に？」

「人が死に関してどう思ってるか」

興味。ないわけではないだろう。けれど、こんな質問をする、ということとは、アリスとしては聞かれたくない部類の質問なのではないだろうか。

「あるよ。でも、アリスお姉ちゃんが嫌なら、言わなくていいよ」

アリスはクスリと笑った。

「ふふ、ありがと。澪は、本当にいい子ね」

「そんなことないよ」

私達はそれきり、しばらく黙って歩いた。

彼岸花が綺麗。道の脇を固めるようにして咲く花々は不思議で、本当に死者の国に来たみたい。

「ねえ、澪」

「なあに」

「あなたは、お父さんのこと、好き？」

私は首を振った。

「愛してる」

何よりも、誰よりも。

「……そう」

アリスはそういうと、何も言わずに歩く。私も疑問を口に出さず、アリスと手を繋ぎながら歩く。

しばらく変わりばえのしない道を歩いていると、前の方から女の人が歩いて来た。

「ん？ ……アリスじゃないか！ どうしたんだ、こんなところに！」

その女の人は、ほとんど一瞬、いや、一步でこちらのすぐ前まで来た。

「あなたのところの閻魔に用があつて来たのよ」

「へえ、映姫様に？」

アリスは頷いた。構わず歩いているのだが、その女の人は私達について歩いている。

女の人は着物のような古式ゆかしい服装で、腰には大量の古銭を吊り下げ、手には大鎌。髪の色は赤みがかつていて、眼光は鋭い。チヤキチヤキの姉貴風、といえはわかりやすい……のだろうか。

「小町、あなたこそ何の用？ 仕事はいいの？」

「いいんだよ。最近外界から裁判所に来ることが多くなってな、あたしは商売あがったりさ！ ま、困るかそうでないかといえは、困らないんだけどね！ あははははははは！」

コマチ、という人は豪快に笑った。ひとしきり笑ったあと、ようやく私の方に視線を向けた。

「うん？ アリス、こいつ誰？」

「漣よ。ほら、漣、自己紹介」

アリスに促され、私は口を開いた。

「私はミオ・マーガトロイド。外来人で、幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹にしてみました。よろしくお願いします」

私は簡単にそう言うと、軽くおじぎをした。

「へえ、よくできた子供じゃないか。あたしは小野塚小町。三途の川の舟守さ」

三途の川……。舟で渡るのか。知らなかった。

「にしても、お前、死にたいのか？」

「どうして？」

「いや、普通の子供は地獄になんて行きたがらないからさ。もしかしたら、って思ってたな」

確かに、私だってアリスがここに用事がなければ来たいと思わなかっただろう。

「私は、死にたくないから」

「そりゃ重畳。一つしかない命、粗末にすんなよ」

「ありがとう、コマチさん」

「小町でいいよ」

そう言いながら、コマチは快活に笑った。

「そうやって諭してると、死神っぽいだけだね」

「うるさい、あたしはいつでも模範的な死神さ！」

「どの口が言うのよ……」

アリスは笑っているけど、怖くはないのだろうか。この人は、死神を名乗っているのに。

私の怯えを、コマチはいともたやすく読み取った。

「うん？ 漣、あんたあたしが怖いのかい？」

「……ごめんなさい」

私が謝ると、意外にも彼女は嬉しそうに笑った。

「気にすんな！ こんなでも怖がってもらえるんだな！ いやあ、

アリス、本当にこの子はいい子だな！」

「あのね。もうちょっと弁明しようとは思わないの？」

アリスが言うと、コマチは何かに気付いたような顔をした。

「ま、怖がらせるのは悪いよな。漣、あたしは死神だけ狩る方じゃない。運び屋さ」

「……そうなの？」

私が聞くと、コマチはニカリと笑った。

「おおよ！ その証拠を見せてやる！ ……アリス、目的地は映姫様とここでいいんだな？」

「まあ、送ってくれるってんならありがたいけど」

「おっしや！」

そうコマチは嬉しそうに言うと、死神の鎌を振り上げ、遙か遠くを見つめた。

「漣、これがあたしの……力だ！」

ヒユカ、と地面に鎌が突き立った。が、特に変化は見られない。

「さ、一步踏み出さな。そうすれば、あたしの力の凄さがわかるよ。じゃあね、漣、アリス」

そこにいて、これからもかなり歩かなければならないのに、コマチはまるで目の前に目的地があるかのような口ぶりだった。

「ありがとう。じゃあね」

アリスは一步踏み出した。すると、消えた。

「……アリスお姉ちゃん？」

「ほら、あんたもついて行くだよ！ 死神妙技、名付けて縮地！ とくと味わいな！」

「それは仙人の……」

言葉を言い切る前に、私はコマチに押され、一步進んだ。すると、景色は一変していた。花の咲き誇る美しい道から、荘厳な裁判所の入り口まで、一瞬で移動していた。後ろに下がっても、また景色が一変する、ということとはなかった。

裁判所の前で待っていたアリスの前まで駆け足で行く。

「すごいでしょ、小町の能力」

私は頷いた。本人は縮地と言っていたが、それとはまた違うような気がした。

「さ、三時間ほど短縮できたわね。運がよかったわ。さ、映姫に会いにいこうよ」

そう言つとアリスは裁判所の扉を開けた。

「……え」

その向こうには、驚くべき光景が広がっていた。

愛するお父さんと私

裁判所の中は、テレビで見たようなものとほとんど変わらなかった。違うのは、裁判官が座る場所と、証言台しかないこと。弁護人が座る場所も、検察が座る場所もない、奇妙な裁判所だった。

今はそこにスーツを着た男性が立っており、口うるさく何かを言っている。その言葉を黙って聞いているのは、小さな、私くらいの女の子だった。頭に偉そうな冠をかぶって、手には錫を持っていた。「アリスお姉ちゃん、今審理中だよ、いいの？」

「……難しい言葉知ってるわね。いいのよ。黙って聞く分にはあいつ何にも言わないから」

おもちゃを見つけたような顔をしたアリスは、裁判所の周りを囲うようにして設置されている傍聴席の、裁判官と証言台に立っている人とはつきり見える席に座った。私達以外に、傍聴している人はいなかった。

「ほら、漣。ここ座って。どんなヤツがどんな言い訳してるか聞きましよ。面白いわよ」

私は黙ってアリスの隣に座ったけど、内心穏やかではなかった。いくらなんでも、趣味が悪いと思ったからだ。人間、必死になれば何でもするし何でも言う。嘘もつくなんて当たり前。それを面白がるなんてことは、私にはできなかった。

「へえ、あいつ面白いわよ、ほら、みてご覧なさい」

そもそも、なぜここはなんのチェックもしないのだろう。ザル警備にもほどがある。

「漣、ほら」

「え？」

アリスに言われて、私は証言台に立つ男性を見た。全然面白くなかった。アリス、どうして、どうして。

「お父さん」

「え？」

ねえ、アリス。どうしてお父さんがここにいるの？

「お父さん！」

私は思わず、叫んでしまっていた。いけないことだと知ってはいたけど、けど。

私が叫ぶと、女の子は私の方を見た。それからお父さんを見て、一言。

「……と、彼女は言っていますが。何か弁明はありますか、ななほし七星」

私と同じくらいの年の女の子は、私と同じくらい冷たい声色でそんなことを言った。

「お、俺は知らない！ あんな子供も、あんな女も、知らない！」

知らない？ ……知らないって、どうして？ 忘れてしまったのかな。私は、忘れられたから、ここに来たの……だろう、お父さんの口ぶりからすると。

「知らない？ 忘れていた？ ……それは通りません。ならばなぜあなたは……毎月大量の金銭を彼女に送っていたのです？」

「そんなの、愛してるからに決まってる！」

まるで咎め立てるような女の子の言い方に、私はつい、口を出していた。女の子は私の方を見ると首をかしげ、次にアリスの方を見た。

「アリス。説明を求めます」

「私もよくわからないわ。連れ出しましょうか？」

アリスの提案に、女の子は首を振った。

「……その方が、より早く彼に罪の重さを理解してもらえるでしょう。その年頃の娘には辛いでしょうが、いつか知ることです。むしろ、今知らねば永遠に知る機会は訪れないでしょう。」

星空溼。発言を許可します」

私は一度深呼吸をした。大丈夫。お父さんは悪くない。だから、だから大丈夫。

「な、何から説明したらいい？」

「……そうですね。あなたとこの男性の関係について、ですかね」「わかった、裁判長さん」

「映姫です」

私はきよとんとした。

「裁判長と呼ばれるのは相応しくないなのでやめてください。映姫、もしくは閻魔とお呼び下さい」

「う、うん、わかった、映姫」

よく考えて。お父さんが悪く思われないように、言葉を紡いで…。

「嘘は、厳罰ですよ」

「……舌、抜かれちゃうの？」

「厳罰です」

エイキは否定も肯定もしなかった。怖くて、全部本当のこと話してしまおうかと思ったけれど、ダメだ、と首を振る。私の舌と、お父さん。どっちが大事ななんて、比べるまでもない。

「私も、お父さんも、愛しあっています。家族として」

嘘は言っていない。そうだ、悪いことなんて、何も無いんだから、包み隠さず言えばいいのだ。

「……あなたは、父を愛している。それは誰が見ても明らかです。では、彼はどうか？」

エイキは、お父さんの方を向いた。見ているこっちが凍りそうな、冷たい瞳だった。

「お、おれ、俺は！」

「嘘は、厳罰ですよ」

再び、エイキはそんなことを言った。けど、私に対して言った時よりも数倍、本気を感じた。

「……俺は、そんなガキを愛していない」

私は、何も考えられなくなった。

何も、考えたくなかった。

「お、お父さん？　なんで、なんでそんなこというの？」

「なんでもクソもあるか。あの女が浮気して作ったお前なぞっ！」

浮気。ウワキ。お父さんの言葉を信じるなら、私は、お父さんの子供じゃなくて。私は、要らない子で。

違う。私は頭を振る。

「じゃあ、なんでお父さんは私に『愛』をくれたの？」

「愛い？　んなもん、俺は……」

「毎月、送ってくれた。たくさん『愛』を、毎月、たくさん！

それが、お父さんが私を愛してるっていう、何よりの証拠じゃないのっ！？」

「そんなもん送ってない！」

「いいえ」

エイキが、鋭く口を挟んだ。

「あなたの送ったお金」

「それがどうした？」

「彼女は、それをあなたからの愛だと、思っているようですね」

エイキの言葉のせいで、お父さんは私を露骨に嫌そうな目で見た。存在すら許さない、そんな、この場にいる誰よりも冷たい目をしていた。

「は、はは。……気持ち悪い」

必死で積み上げていたのに、完成する寸前で崩された積み木を思い出した。いや、あるいは、賽の河原で、ただひたすらに石を積み上げ、あと少しのところまで鬼に崩されたような……そんな感覚が、私の中でした。

「ど、どうして。私、お父さんのこと、愛してるんだよ？　家族として、お父さんとして。どうして気持ち悪いなんて」

「それが、気持ち悪い。お前は、俺の子供じゃねえ。だから、早く、消えろ」

私は、黙ることができなかった。

「なんで！？　私は、お父さんが帰って来た時のために、必死で、

お父さんからのお金貯めてたんだよ!? お父さん、お願い、気持ち悪いなんて言わないで! 一緒にいて! そばにて!」

言葉を尽くせば尽くすほど、お父さんと私との距離は離れて行く。「なんでもする。どんなお願いでも聞く。だから、お願いだから」

これが、本当の気持ち。私の、包み隠さない真実。

「お父さん、私を……愛して……!」

「……断る」

返ってきたのは、拒絶だった。違う。もっと、近くで。もっと、そばに! そうすれば、わかってくれる。わかってくれる……。

私は傍聴席から飛び出し、お父さんのそばまで走る。誰にも、止められなかった。お父さんのそばまで、すぐに辿り着いた。お父さんを見上げる。久しぶりに見たお父さんは随分と痩せこけていて、疲れている様子だった。大丈夫、私が癒してあげれば、何も問題はない。

「お、お父さん。わ、私は、星空溼、だよ。私、私なりにお父さんのこと愛してる。大好き。一緒に暮そう? ね、きつと、疲れもとれる、かもしれないし。」

……だから、愛して、お父さん。娘としてじゃなくてもいいから「黙ってくれ、もう。帰れ。消えろ。……死ね」

視界が、歪んだ。目の前の光景が潤んで、何も見えなくなる。

「……判決、黒。これ以上審理の必要性は認められません。地獄で娘の心を歪めた罪、とくと反省なさい」

「はっ。お前のせいで地獄行きだ。どうしてくれる。ほら、お前も死ね!」

怨嗟の声が、私の心を埋め尽くす。うん。お願いだ。やっと、かけてもらえた言葉だ。叶えてあげたい、かなえなきや。

「わかった! 待っててね、お父さん!」

私はとびきりの笑顔をお父さんに向けて言った。

「連れて行きなさい。それから、その娘の保護を頼みましたよ、アリス。それが善行になります」

誰かが扉を開けて、お父さんのことを連れて行くこととする。足音が私のそばまでくるけど、気にせず、私は声をお父さんに向けた。「待つて」

私は、黒装束に身を包んだ人達を止めた。お父さんが、振り返ってくれた。

「お父さん、最期に、抱きしめ……おてて、つないでいい？」

「……好きにしる」

私はいそいそと、お父さんと手を繋ごうとして、その手が、すり抜けた。

「……え？」

「気付かなかったか？ 俺は、お前のせいで、死んだんだ！ お前も、早く俺を追って死ぬ。地獄で虐め抜いてやる」

「うん、わかった。すぐに逝くね」

死んでいた。お父さんは、すでに死んでいた。だったら、娘の私も、後を追わなきゃ。それが、私の義務なんだ。お父さんも、そう言ってるし。

「何をしているのです。早く、連れて行きなさい」

黒装束の人達は、一礼するとお父さんをどこかへ連れて行ってしまった。

「……死ななきゃ」

振り向いたところで、女の人……アリスが、私の前に立ちほだかっていた。

「どいて、アリス」

「アリス『お姉ちゃん』でしょうが。どこへ行くの？」

さっきまで、私達の会話を知っているはずのアリスは、なぜかそんなことを聞いてきた。

「死に行くの」

「地獄行きよ？」

「地獄に、行きたいの」

お父さんが、待つてくれてるから。

「あなた、あいつの」

「お父さん！」

私は、思わず怒鳴っていた。

「……あなたのお父さん、なんて言ってたかホントにわかってる？
虐め抜いてやるって言ったのよ！」

「わかってるよ。でも、それがお父さんなりの愛なんですよ。どんな形であつたとしても、私はお父さんに愛してくれるなら、それでいいよ」

私がそう断言したとき、エイキが私のそばまで歩いてきた。背の高さは私と同じか、私よりも低いくらい。でも、この人は多分私じや比べ物にならないくらい、違う。何もかもが。

「自己紹介がまだでしたね。私は四季映姫。あなたは？」

「星空漣」

私はそう名乗った。すると、エイキが手に持った錫を、私に突きつけた。

「それは、悪行ですよ」

「……？」

「あなたは、この幻想郷では『マーガトロイド』を名乗るとアリスに言ったのではないのですか？」

「でも、お父さんに認めてもらわないと」

私は相手が誰かなど考えもせず、反論していた。

「血の繋がりはないかもしれない。心の繋がりさえもないかもしれない。ならば、名前だけでも……。その気持ちは、十二分に理解できます。故に悪行ではあれ罪ではありません」

まるで、学校の先生みたいな口ぶりだった。でも、学校の先生でさえ比べられないくらい、偉いのだろうということは、簡単に理解できた。確かに、一度交わした約束を破るのは、いくら繋がりを確かにするためとはいえ、褒められたことではない。名前などの繋がりがなんてなくとも、死んで地獄に行けば、お父さんから愛してもらえるんだから、何も心配はいらないのだから。

「ごめん、アリスお姉ちゃん」

「え、まあ、いいわよ」

アリスは少し照れた様子だった。

「アリス、よく許しました。善行ですね。漣、よく頭を下げました。これで、先ほどの悪行は帳消し、です」

「ありがとう、エイキ。じゃあね」

「行かせるわけにはいきません」

踵を返して一人になろうとしたところで、エイキに服を掴まれた。

「どうして？」

「自殺は罪です」

「そんなの知ってるよ」

「賢いですね。最近では自らの命は自らの物だという理論から、命を投げ捨てる人間が増えてきています。その中でも、自殺は罪だと理解しているあなたは、十分に素晴らしいです」

話が長い。でも、すごくわかりやすい。エイキの表情からは読めないけど、言葉尻から、私のことを褒めてくれているのだということがわかった。

「ありがとう、エイキ」

「いえ。では」

「それでも、私は死ぬよ」

錫で額を打たれた。軽くではあるけど、痛いものは痛い。

「父に歪められたあなたに、罪はありません。けれど、私は一人の年長者として、あなたを打ちました。思い直してください」

「嫌」

私はキツパリと、言い切った。なぜ悪行ですらないのかは知らないけど、それでも私は死ぬのを諦めなくなかった。お父さんが愛してくれる、最後のチャンスかもしれないのに。

「……アリス。もし、この娘が壊れたとして」

エイキは私の目の前で、そんな風に話を切り替えた。

「な、何を縁起でもないことを……」

「あなたは、この娘が治るまで支えることを約束できますか？」
私、何かされるのかな。少し、不安になった。どう壊されるの
だろうか。恐い。

「……当たり前、よ」

「閻魔との約束は、重いですよ。では、溲」

ようやく、エイキは私の方に視線を合わせた。

「あなたの父親は、あなたを愛していません。今までも、これから
も」

「嘘だ」

ピシリと、私の中にヒビが入ったような感覚がした。

「閻魔が嘘を吐くとも？ ……彼は、いや、あなたは本来ならば

祝福されて生まれる子供だった」

「そうだよ、母は優しくかつたし、愛してくれた！」

「幻想です」

私は、何も言えなくなつた。私の頭の中が、真っ白になる。

「あなたは、世間一般、特に外界の日本における愛情を体験したこ
とがありません。だから、両親からの虐待を、愛情だと思い込む
ことができたのです。いくら本や、物語で真実の愛を知っていても、
体験したことがなかつたから、そんな離れ業ができたのです」

「お母さんからお父さんからも虐待なんてされてない！ 私は、
何もされなかつた！ 殴られもしなかつた、蹴られたりもしなかつ
た、タバコを押し付けられたことも、罵倒を浴びせられたこともな
かつた、犯されたり、殺されかけたりなんてこともなかつた！ 私、
虐待されてなんか」

「そうですね。あなたは何もされなかつた。料理を作ってくれるこ
とも、褒めてくれることも、微笑みかけてくれることも、服を買っ
てくれることもなければ抱き締められたこともない。与えられたの
はただ一つ、なんの暖かみもない、お金のみ」

「それが、お母さんとお父さんの愛情表現だったんだ！」

「ネグレクト、という言葉に聞き覚えは？」

「……」

「賢いですね。よく、勉強しましたね。でも、気付きたくなかった。違いますか？」

「ダメ、なの？」

「ええ。愛情を勘違いしてもらっては、困ります。お金は、愛情を表現するのに足る媒体であることは否定しませんが愛情そのものであることはけしてありません。あなたは生い立ちからして不幸であり、幻想に浸りたくなる気持ちもわかりますが、今は前を向いて、アリスとの家族関係を」

「エイキ」

「なんですか」

「私、ダメなのかな」

「……」

エイキは何も言ってくれない。アリスでさえ、何も。

「『愛して』って、そんなに思っちゃダメな事なのかな」

もう、何も見えなかった。生暖かい液体が、視界全体を覆って、潤んで、歪んで。頬に流れる生暖かさが、気持ち悪くて。

「……まさか」

「私、頑張ったんだよ。エイキ。愛してもらおう、って必死だったんだ。お父さんが難しい話しても合わせられるように勉強したよ？ お父さんがお金に困っておうちを訪ねて来たときにお金を好きだけ渡せるよう、お金も貯めた。それでも足りなかったとき、身体を売る覚悟だった。気持ち悪かったし、怖かったんだよ？ 私があげれる全部をあげるって伝えたんだよ？ でも、ダメだったねえ、エイキ。なにが間違ってたのかな？ 私のどこが、ダメなんだと思う？ 私がどうすれば、お父さんは私を愛してくれたと思う？」

エイキは、しばらく目を閉じ、そして、こう言った。

「本当に、頼みますよ、アリス」

目を開けると、鋭い眼光が、私を射抜いた。

「あなたがどう努力しても、あなたは愛されることはなかったでしょう。あなたの存在そのものを、彼は認めていなかったのですから」
私は、かくりと膝から力を抜いた。そんなわけがない。お父さんが、私のことを愛してないなんて。そんなわけ。

「……あなたは、外界では……いわゆる、要らない子供、ということになります」

私は、今日なんど心を砕かれたらう。なんで、私、は……。

「もう、やめて」

「だから、例え死んだとしても、悪霊になりかけている父親に愛されることは、決してありません。むしろ、いたずらに傷を広げるだけですよ。だから」

「やめてッ！」

もう、嫌だ。こんな、こんな辛い思い、したくない。嫌だ。苦しい。

「……こんな人たちに構っている暇なんてない。早く、お父さんの元へ。」

私は二人に見えないようにうつむき、舌を伸ばす。気付かれないうちに、一気にそれを噛んだ。

血の味が口全体に広がって、い、いき、が。

「嚙！？ え、映姫何したのよ！」

「舌を噛んだのです、急いで医師を……小町を呼んで、永遠亭まで早く！ いないなら、永琳を呼んで来てください！ 応急処置はこちらでやっておきますから！」

「ええ、わかったわ！」

アリスが走ってどこかへ行った。

「……大丈夫です。あなたは、死なせません」

口の中に、エイキの小さな手が入ってきた。

……死なせてよ、辛いから。

私は酸素がなくなつたせいか、だんだんと意識が薄れていって、いつしか、私の意識は途切れた。

もう二度と、目覚めなくなかった。

嘘と私

目が覚めると見知らぬ天井だった。体を起こして、周りを見る。

この部屋には私の寝ていたベッドしかなかった。全体的に暗いイメージで、私から見て右の壁に、学校にあるようなスライド式の扉があった。六畳ほどの空間に、アリスとエイキ、そしてエイリンがいた。アリスは私のそばにいて、エイキは入り口そばの壁にもたれかかるようにして立っている。エイリンはアリスの隣で、私のことを見つめていた。

「もぐ」

挨拶しようとして、出来なかった。何かが口に嵌められていることはわかった。それが何か触って確認しようとして、それすらもできないことに気付いた。

「お目覚めですか、溼」

「もぐ、もが？」

「自殺未遂に加えて、死にたがり。失礼は承知で猿轡と拘束服を着せています。着替えさせたのは女性なので、なんら心配する必要はありません」

……私が自殺しないための処置だろうか。なら、嘘を吐いて、この人から離れて、そこで死のう。

「……ねえ、溼。舌、もう噛まない？」

頷く。もちろん、嘘。

「嘘は、厳罰ですよ。永琳、お願いします」

「はいはい」

エイリンが私の後頭部に手をやって、口にかかっているタオルを外してくれた。拘束服の方は、まだ脱がせてくれないけど。

「……ありがとう、エイリン」

私がお礼を言うと、彼女は首を振って立ち上がった。

「気にしないで。もう死のうだなんて思っちゃダメよ。……じゃあ

ね、映姫」

「ええ。またお願いしますね、永琳」

スライド式の扉を開けて、永琳は部屋を出て行ってしまった。死のうと思つては、ダメ？ なぜ？

「……。では、漣」

ゆっくりと、私にエイキが近づいてくる。錫を胸の高さで持つている姿は、まさしく地獄の閻魔大王。

「その前に。お父さん、どうなったの？」

歩みを止めることなく私のすぐそばまでくると、エイキは私を憐れむような目で見つめた。

「あなたの父親は、半悪霊となつてしまいました」

「私がすぐに死ななかつたからだよ。目の前で死んであげれば、少しは」

その続きは、唇に錫が当てられたために言い出すことができなかつた。

「父親を想う純粋な気持ち。それは評価します。しかし、だからと言って自殺は認められません」

キツパリと、エイキは言った。

「お父さんのそばにいちや、ダメなの？」

「はい。あなたの父親はもう死んでしまいました。あなたの関係ないところで、勝手に、自らの命を絶つたのです」

お父さん、自殺だったんだ。私のせいだ、と言っていた。

「じゃあ、私はお父さんを追うね」

また錫で打たれた。

「いけません。それはいけません。……アリス、この娘はかなり冷静で理的だという話でしたが？」

「……父親のことになると、年相応よ。いえ、それ以上に盲目的ね。エイキはアリスの言葉を聞いて、少しだけ残念そうにした。

「あなたほどの年頃だと、父親、母親が世界の全てに思えるでしょう。両親以外の大人が信用に足るに値しないような人間ばかりだっ

たなら、なおさら」

「じゃあ」

エイキは錫を自分の胸元まで戻すと、静かに言い切った。

「それでも、あなたは死ぬべきではありません」

「死ぬことが、娘としての義務なの」

「そのような義務はあなたの頭の中にしかありません」

「お父さんが死ぬと言っていた!」

「だからと言って、素直に死ぬ必要はありません」

「……わかった、もういい!」

この人に認めてもらうことは、できない。そもそもこの人はお地蔵様みたいに石頭だ。一度決めたことは、例え何があるうと変えない、そんな人なのだろう。この人は説得しようとするだけ無駄だ。

「じゃあ、私アリス……お姉ちゃんと帰るから、これ、着替えさせて」

私が言うと、しばらくエイキは悩んだ。懐から何かを取り出そうとして……やめた。

「約束してください。自殺しないと」

「うん」

私はすぐに頷いた。私にだって、策はある。

「約束、しましたよ。信じています」

嘘は、厳罰です。幾度と聞いた言葉は、発せられなかった。

「……使わないの?」

アリスが、意外そうに聞いた。

「何をです?」

「浄玻璃の鏡」

エイキは首を振って、アリスのそばまで歩いた。

「あれは、罪人に使う物です」

「使おうとしてたじゃん」

「……はい。悪行ですね、全く。私としたことが、子供の言うことを疑うなど」

ズキ、と胸が痛んだ。ジクジクと、膿むような痛みが心を襲う。
「では、アリス。漣を頼みますよ」

「わかってるわ。妹、だからね」

嬉しそうにアリスは微笑んだ。その様子を見て、また胸が痛む。

「ああ、それから、博麗霊夢に伝言が」

「何かしら」

「あまり隠し事はないようにと」

「わかったわ」

アリスは頷くと、私の手を引いて外に出ようとした。

「それでは、漣、アリス。善行を積み、良き人間となるのですよ。

特に、漣。あなたはまだ幼い。間違うこともありましようが……絶望せずに、前へ進むのです。さすれば、いつかは道がひらけましよう」

格言めいた、長い言葉。でもそれは、全部私を思つてのこと。こんなにも気にかけてくれている人を、私は、騙すのか。

「……うん、わかったよ」

「そうですか。では」

私はアリスと一緒に部屋を出た。長い廊下が続く、変な場所だった。

「さ、ついてきて。帰つてお祝いしなきゃ」

アリスは嬉しそうに私の手を引いて、歩き始めた。多分、ついていけば外に出れると思う。

「……お祝い？」

「ええ。自殺、思いとどまってくれたでしょ？ そのお祝い」

胸が軋んだ。

「そんなの、いちいち祝わなくても」

「いいえ。家族が死んでしまつて、一人きりになって、その後を追いたい、って気持ちを振り切るのはとても大変よ。あなたみたいな子供なら、なおさら。」

それに、自殺なんてしなくてよかった、って思つてくれなきゃ困

るわ」

痛い。胸が痛い。優しい言葉なんてかけないで。私はあなたに嘘をついてる。私、まだ死ぬつもりなのに。まだ、自殺願望は消えてないのに。

「……………？ どうしたの、顔が暗いけど」

「私、行きたいところがあるの」
痛い。けど、けど。

「どこ？」

ごめん、アリス。私は、それでもやっぱり、お父さんのそばにいたい。これがきつと最後なんだ。お父さんに見てもらおう、お父さんに愛してもらおう、最後のチャンス。だから、私は。

「……………昨日見た湖」

ごめん、エイキ。ごめん、アリス。

体の変化と私

それから四時間ほど、歩いた。もうすっかり夕暮れ時で、空もかなり赤くなっている。湖の水が赤を反射して、すごく綺麗だった。

「……こんなところに何か用？」

「景色が、見たくて」

……死にたい。けど、アリス達を裏切りたくない。だから私は賭けることにした。

紅魔館の主、レミリア・スカーレット。彼女が私の気配を感じ、ここに使者を送ってきたら死ぬ。そうでなければ、お父さんには六十年後くらいに会いに行こう。

そこまで思っ、自分で自分を笑う。

レミリアの言った通りになった。私は今、心の底から死を望んでいる。死にたくなるよう苦痛があるという暗示だとばかり思っただけに、少し不思議な気持ちだった。

……レミリア、気づくかな。気づかないかな。

私は綺麗な湖を眺めている。もっと、こんな景色を見たい自分がある。こんな景色をアリスと見ていたい自分が、いた。自分の中では、二つの思いが激しくぶつかっていた。

死にたくない。アリスを、エイキを裏切りたくない。

死にたい。お父さんに会わなきゃ。会って、愛してもらわなきゃ。自分が二人いるかのような錯覚に陥った。

「……」

チクリ、と手に刺すような痛みが走った。ゆっくりと手を見ると、手のひらの中に小さなコウモリがいた。

「アリスお姉ちゃん」

「ん」

「おトイレ」

私はそう言うと、アリスの横を通り抜け、湖のそばにある森に入

る。アリスが見えなくなつたところで、コウモリを手放す。そのコウモリはたくさんに分裂し、いつしか黒い塊になっていた。その黒塊はやがて小さな人の形をとり、やがてはレミリア・スカーレットになつていた。

「こんにちは、ミオ。わざわざこんなところに出向いて、しかもひと気のないところまで移動してくれた、ということは……。いいのね？」

賭けの結果は、お父さんに会いに行くことに決まつた。

「うん」

「じゃ、行きましようか」

頷く。バサバサと耳障りな音が私を包む。

「ミオ？ 何の音……っ！」

気付かれたけど、もう遅かつた。私の体はコウモリの集団に持ち上げられ、地面を離れていた。

「レミリア！ 止めなさい！」

「私はただこの子の望みを叶えてあげるだけ。じゃあね」

「望み！？ まさか、ミオ！？」

レミリアと一緒に私は宙を飛んで紅魔館の中へと入つた。レミリアと始めて会つた、謁見室のような部屋だつた。腕を引かれ、豪華な椅子の裏にあつた扉まで連れていかれた。扉を開けると、部屋の中の様子が見えた。

天蓋付きのふわふわもこもことしたキングサイズのベッドが、一つだけあつた。クッションもたくさんベッドの上においてあり、まるでお姫様が眠る場所のようだつた。

「ここは？」

「私の寝室よ」

レミリアは部屋に私を連れ込むと、扉を閉めて鍵をかけた。ここから出す気はないらしい。私も、出る気はない。ここが私の墓場になるのだ。

改めて部屋を見回すと、ここだけ、壁の色が赤というよりもピン

クに近い色をしていた。なぜかを聞けばきつと、内臓の色だから、などという可愛げのない回答が返ってくるのだろうけど。

私は腕を掴まれ、半ば力づくでベッドの上に放り投げられた。ふわりとした感触が、背中全体を包んだ。心地よい感覚に、安心する。

「……食べないの？」

「食べるわよ」

きしりと、ベッドが少し軋んだ。レミリアが、私を見下ろすように私のことを見ている。その瞳は酷く扇情的だった。……何も感じないが。

……なぜなにも感じないのだろう。私はあらゆる能力を増幅し、少しの攻撃で死ぬのではなかったのか？

「どうしたの？ 難しい顔して。私だけを見なさい」

す、とレミリアは私の顎に指を当てた。背筋が痺れるような感覚がした。

「……食べないの？」

「食べるわよ。……色んな意味で、ね」

思わず体を起こそうとして、肩を押さえつけられた。悪戯をしているときの子供のような顔で、レミリアが首を振った。

「あなたは、女の子」

私は思わず、そんなことを口にしていた。

「あら、耳聡いのね。いくつ？」

「……十歳」

レミリアはにこ、と笑みを深くした。

「まだ、あなたの年頃の子は食べたことなかったわ。……痛いのは嫌でしょ？ だから、気持ちよくしてあげる。ほら、怖がらないで」

レミリアはそれから、私の全身を撫でていく。東野にされていることは同じはずなのに、不思議と嫌悪は抱かなかった。

「……ふふ、頃合いね」

全身を撫で回され、すっかりできあがってしまった私に、レミリ

アは淫靡に舌なめずりをした。私の首筋に口を寄せる。

「……レミリア。いいよ」

「……いただきます」

あれ、なんでレミリアがその挨拶を？

そう思ったのとほぼ同時、私の首にレミリアの牙が突き立っていた。皮を引き裂き、血管に牙を滑り込ませる。首に生暖かい液体が大量に流れていることがわかった。

様々な痛覚神経を刺激しているはずなのに、私は全く痛みを感じなかった。

むしろ。

「……ん」

「くくっ……くくっ……」

むしろ、もっと。全然、痛くない。それどころか。

「……あ」

「じゅる、じゅる……」

吸われることを、嫌だと思えない。このまま吸い尽くされたいとさえ思う。この経験したこともないような快樂が手に入るなら、私は。

「……ん？」

私の血を啜っていたレミリアは、扉の外に目を向けた。波のように押し寄せていた快感が、嘘のように消えた。

「レミリア、飲まないの？」

私の声はまるで乞うようだった。そんな自分に、嫌気がさす。

「待つて。……来る」

レミリアの妖しく光る赤い瞳は、扉の向こうに誰かを見つけたようだった。その、次の瞬間。

寝室の扉が吹き飛んで、たくさんの人形を従えたアリスが、立っていた。

「ミオはどこ？」

視線をキョロキョロとさせていたアリスは、素裸にされていた私

の方を見ると、顔を歪ませてレミリアに向かって叫んだ。

「溼に何をした！」

「ただ、請われるままに血を吸っただけよ。痛くなんてしてないわ。至上の快楽を、一緒に与えてあげたの。見て、この顔……は、変わらないわね。この子の身体、触ってみて？ 全身しつとり濡れてるわよ？ まるで甘い蜜のよう。ふふっ」

レミリアに撫でられて、私はピクリと体を跳ねさせた。それが、さらにアリスの怒りを加速させた。

「痛い目みたくなかったら、溼を離しなさい」

騎士のような甲冑を着込んだ、アリスよりも大きい人形が、レミリアに向かって一歩進んだ。あれを、アリスが動かしているのか。

「この子が、望んだことよ」

「ひゃっ」

私の内腿を慈しむように撫でられ、思わず声を上げてしまった。

「……………。死にたいの？」

「今あなたはどんな気持ちなのかしら。目の前で大切な人が壊されていく感じ？ それとも、犯されて心身ともにメチャクチャになった家族を見る感覚？」

「黙れ。何がしたい」

「この子を食べたい」

まるで見せつけるように、レミリアは私の耳たぶに口をつけると、噛みちぎった。耳から血が流れていくのは感じるが、痛みは感じない。

「……………ん？」

しっかり咀嚼したあと、レミリアはそんな風に疑問符を浮かべた。「それ以上、妹に手を出さないで」

「……………食事の邪魔をしないで」

レミリアは、ふわふわとしたスカートの中から、カードのようなものを取り出した。

「……………弾幕勝負？ 勝負？ そんなもので、私の怒りが収まるとで

も!？」

「譲歩してやるうって言うてんのよ。吸血鬼に、なりたての魔法使いが敵うとどと思ってるのかしら」

アリスは腕を指揮者のように動かした。彼女の後ろから、大小様々、古今東西を問わず優秀な武器防具で武装した人形が出てきた。人とよく似ているけど、呼吸音がしないし、血が流れていないことはすぐにわかる。

「……本気、ってわけ？ 咲夜達はどうしたのかしら」
「眠ってもらってるわ」

レミリアはここで始めて、焦ったような顔をした。

「へえ。やるじゃない」

「ミオを返せ。さあ、あなたにも見せてあげる。私の、力を……を？」

アリスは、最後で不審な声を上げた。脈拍が少し上がってる。何かを恐れ……いや、驚いてる？

「……あ、あなた、み、耳たぶが」

「……え？」

指摘されて、自分の耳たぶを触る。さっきレミリアに齧られたところが、きれいさっぱり再生していた。

「……」

「痛いっ!」

いきなりレミリアは私の拳に噛り付き、そのまま噛み砕いた。なぜか、もう痛みは感じるようになっていた。

レミリアはしばらく咀嚼して、すぐにベッドの上に吐き出した。ぐちゃぐちゃになった私の拳がぶちまけられる。

「……アリス、この子は返すわ」

「どついう風の吹きまわし？ それからこの子の拳を食べたこと、どうしてくれるわけ？」

比較的柔らかい装備をしている人形が私のそばまできて、私のことをゆっくりと抱き上げた。アリスのところに運ばれるころには、

食べられた私の拳は再生していた。

「ライオンがライオンを食べないように、人間が人間を食べないように、吸血鬼も吸血鬼を食べないわ。それが答えよ」

私は、その答えの意味がわかってしまった。

「わ、私、は」

私はきつと、いつも通りの無表情。でも、声には、身体情報には私に怯えているということが出ているはずだ。何を言われたのか、わかってしまったからこそ、怖かった。

「ようこそ、吸血鬼の世界へ。ミオ・マーガトロイド」

レミリアはニヤリと笑ってそう言った。

「……くっ。ミオ、取り敢えず、帰りましょう」

警戒しながら、アリスはゆっくりと下がっていく。

「……あら、あら。逃げられるといいわね、クスクス」

私たちが謁見室のような部屋を出る寸前、そんなからかうような声が聞こえた。

アリスは、何も言わなかった。

再確認と私

吸血鬼になってしまった。アリスと一緒に暮らしていけるのだろうか？

私が真っ先に心配したのが、そのことだった。アリスの心拍や呼吸数が詳しくわかるというのも怖かった。吸血衝動もある。けど、なにより嫌なのは、アリスに見限られること。生きているのに一人それは、何よりも恐ろしくて、何よりも嫌なことだった。

そして、そこで始めて、私は気付いたのだ。私は、何をしようとしていたのか。こんなにも、こんなにも必死で助けてくれる家族がいるのに、私はお父さんへの想いを優先させてしまった。その、罪深さを。

「……アリスお姉ちゃん」

「何が？」

アリスは私を抱きかかえながら、曲がり角の向こうを確認していた。今、紅魔館から逃げる最中。アリスと私は隠れながら移動を続けていた。ここへ来るときも、隠れて移動してを繰り返し、人形を取り出したのはレミアアの寝室の前だったそうだ。

「アリスお姉ちゃん、私戦う」

なぜだか、今は誰にも負ける気がしなかった。かつて他人に感じていた恐怖がまるで嘘みたいに、薄れては消えていく。

「……無理しなくていいのよ」

苦々しい様子でアリスは言った。

「お姉ちゃん、ごめん」

「何が」

「約束、破ってしまって」

アリスは何も言わなかった。

「お姉ちゃんとの約束も、エイキとの信頼も裏切って、一人で死のうとした。ごめんなさい。私、お姉ちゃんのこと、全然考えれてな

かった。お父さんのことで、頭がいつぱいになって、それで」

アリスは、私の頭に手を乗せた。

「あのお父さんじゃ、いつぱいいつぱいになるのも仕方ないわ。それは、わかってる。でもその口振りじゃ、もう死ぬ気はないんでしょ？」

頷く。もう、自殺はしない。お父さんに会うのはもっと後になる。お父さんは、きつといくら後になっても愛してくれる。そう、地獄で、お父さんからの終わることのない『愛』を。

「どうする？ お姉ちゃん、皆、殺しちゃうの？」

アリスは首を振った。

「いえ、誰一人傷つけないわ」

「……サクヤは倒したんでしょ？」

「まさか」

アリスはニヤリと笑ってそう言った。全部はったり、だったのか。今なら大丈夫、行きましょ」

「うん。……それからお姉ちゃん、私一人で歩けるから」

私を担ぎ上げたまま走り出そうとしてたアリスに私はそう言った。はやく体を動かしたい。暴りたい。そんな衝動が体の中にあった。そう。わかったわ。行きましょ、ついて来て」

アリスは一気に走り出した。私も彼女についていき、入り口まで一気に駆け抜けた。

エントランスまで辿り着くと、アリスが足を止めた。そこには、一人のメイドが立っていたからだ。

「お客様。私や美鈴に連絡なしに館に侵入されては困ります。すみませんが、外に案内させていただきます」

「……よろしく、サクヤ」

私はサクヤに対する恐怖が消えていた。いや、それどころか、彼女に対して乾くような変な気持ちを感じる。

「……お嬢様からは、丁重にお送りしると仰せつかっております。ので、私はあなた方をお送りします」

それはまるで、命令がなければ何かをしている、という宣言であるかのようだった。

「それはどうも……」

アリスは警戒を解き、普段通りの調子に戻った。

「しかし、次無断で館に入られた場合……」。

二度と館から出ることは出来ないでしょう。……とだけ、忠告いたします」

精一杯の脅し。私はサクヤのセリフをそう感じた。怖いどころか、必死さが伝わってきて微笑ましくさえある。

「わかったわ。胸に刻み込んでおくわ」

「ありがとうございます……」

サクヤは玄関の大扉を開けた。アリスと私はサクヤに一礼をしてから紅魔館から出た。

「……面白かったね」

「え？」

私の感想に、アリスはたじろいだ。

「……ごめん、なんでもない」

「そ、そう？」

彼女の反応で、自分の抱いた感情が、異常なものだと気付いた。死の危険を感じさせようと必死なサクヤが、面白くて、楽しくて。私は人間ではなくなったということを、嫌でも実感した。

「おかえりですか、お客様」

「え、ええ」

メイリンは鋭い目つきで私とアリスを睨むようにして見ると、門を開けてくれた。

「次からは、私のところから入ってきてください」

「わかったわ」

アリスは頷くと、半ば駆け足で紅魔館から出た。私もゆっくりとした足取りで、アリスに続く。空を見上げると、月が上がっていた。思ったより長い間レミリアと過ごしていたようだ。

「……ねえ、漣、あなた、目が赤いわよ」

「……ごめん、お姉ちゃん。私吸血鬼になってしまった」

アリスは、なんと言うだろうか。

「歩きながら、話しましょうか」

頷いた。アリスの手を取ろうとして、私は自分が人間ではないことを思い出し、手を下ろした。

その次の瞬間、アリスが私の手を握ってくれた。昨日も歩いた森を、ゆつくりと私たちは歩いている。

「……吸血鬼に、ね」

「うん。でも、迷惑かけそうになっただら出て行くから、嫌わないで。ううん、嫌ってもいい。せめて、殺さないで」

吸血鬼は人間の敵だ。人間の味方であるアリスからしたら、憎い仇も同然である可能性は十分にあるのだ。

「いや、別に嫌いもしないし殺さない……とは、約束できないわ」
「……そうだよね」

まあ、嫌われはしないのだからいいか。

「あなたが私を食べようとしないう限り、殺さないわ」

私ははっと、アリスの顔を見た。

「いいの？　ありがとう」

よかった、よかった！　私、殺されないんだ。退治されちゃわな
いんだ……。

「にしても、吸血鬼に、ねえ。どんなことができるか、わかる？」
アリスに言われて、自分の中を探してみる。けど、体感的には普

段通り。

「わからない。ごめん、お姉ちゃん」

「いいのよ。でも、何ができるかくらいは知っておいた方がいいわ
ね……。永遠亭にでも行く？」

私は首を振った。

「いい。私は、お姉ちゃんの妹なんだから、吸血鬼の力なんて積極的に使いたくない」

「嬉しいこと言ってくれるわね」

アリスはそう言って笑ってくれた。吸血鬼などという化物になった愚かな私に、こんな微笑みをくれる。

ああ、この人が、私の家族なんだ。身を包む幸福にを噛みしめる。

「…………お、お姉、ちゃん」

この流れにまかせて、言ってしまうおう。言いたかった一言を。なんて、返してくれるだろうか。お父さんみたいに返されるのだろうか。怖い。アリスに死ねなんて言われたら、どうしよう。でも、きつと、多分。

私は一縷の望みかけて、言ってみた。

「なに、漣？」

「あ、愛、してる」

「…………。私もよ、漣」

私はやっと、誰にも首を傾げられないような愛情というものを理解できる。そう感じた。

新しい愛情と私

アリスの家に帰って、私とアリスは食事を取ることにした。朝に採った食事と寸分違わぬ食事。

「いただきます」

「いただきます」

朝と違って、二人合わせて挨拶をする。僅かな違いだったが、より家族の繋がりのようなものを感じて、嬉しかった。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

アリスがスープを口に含む前に、話しかける。

「レミリアのところには外来人、いたのかな」

「いたんじゃない？ でもどうして？」

「少しだけ言うのをためらう。」

「レミリアが私を噛むとき、いただきます、って言ったから」

「……」

思った通り、アリスは快い表情をしなかった。

「……あなたはご飯になりに行ったのよ」

「うん、ごめんなさい……」

叱られてる。先生以外に叱られるなんて、初めての経験だった。

怖い、とは感じる。

「……次は、ないわよ。もし次自殺なんてしようものなら、縛り付けてでも改心させてやるからね」

「はい」

家族の縁を切る、なんて言われるかと思ったけど、そんなことはなかった。だから、嬉しい。叱ってもらえた。悪いことをしたら叱られる。当たり前のことなのに、嬉しかった。叱られて喜ぶなんて変だとは思ったが、それでも、悪い気はしなかった。

「レミリアのところの外来人が来た、っていうのはわかったけど、

エイキのところにはいないのかな？」

アリスはスープを飲みながら、何かを考えている様子だった。しばらく黙ったあと、ゆっくりとアリスは口を開いた。

「あなたの父親を連れていった黒服。あれ、外人だって噂よ」

思い出す。随分冷たい印象がするから死神だと勝手に思っていたが、外人人だったのか。

「でも、なんか冷たかったよ？」

「連れて行く相手が相手だし、仕方ないんじゃない？」

「お父さんは、悪い人じゃないよ」

「あなたの中ではね」

思わず、違うと叫びそうになったけど、やめた。すぐにわかってもらわなければならない。ゆっくり、私とお父さんとの愛情を理解してもらえばいいんだ。

「うっ……。わかった。じゃ、いただきます……」

挨拶はしたのだけど、ついもう一度そう言って、スープを口に入れる。

……。

「どう？ おいしい？」

「うん。とってもおいしい」

何も味を感じなかった。砂でも食んでる気分になる。味もしないのに舌の上を転がる液体みたいな物質が気持ち悪くて、吐き出しそうになる。それでも、半ば無理に飲み込んだ。

こんなとき、普段表情が変わらないというのは便利だ。何か驚きがあっても隠せるし、美味しいと言ってるのに嬉しそうでなくとも疑われない。

「ねえ、お姉ちゃん。吸血鬼の主食ってやつぱり」

一度は騙せたのに、私は疑われるようなことを口走っていた。もう二度と、家族を騙したくない。そんな思いからだった。

「……血よ。あなたまさか、血が欲しいとか？ さすがに、血は用意してやれないわ。……でも、その代わり、『狩り』を咎めるつも

りも……ないわ」

「大丈夫、そんなに欲しくないから」

ふるふると、首を振った。血が欲しいのは事実。でもそれはまだ本が欲しい、自転車が欲しいのとほとんど変わらない。

でもこの気持ちは、もつと強くなるのだらう。その時私は、どうするのだらう。

「ご馳走様」

「ほとんど食べてないじゃない。出された物は全部食べる。この家では、それがルールよ」

「……はい」

家のルールを教えてもらって、それに従う。それは私がゲスト扱いから家族になった証左のようで嬉しいのだけど、食べるものが何の味もしないものだったなら、流石に辟易する。

栄養を摂取するために食べるわけではない。味を楽しむために食べるのではない。

ならば、一体この食事になんの意味があるのだらう。

「お姉ちゃん、食べる意味、ってなんだと思う？」

「私は、習慣かな。本当は食べなくてもいいんだけど」

知らなかった。つまり、お姉ちゃんも人間じゃないのかな。聞いても大丈夫かな、変に思われなかな。

「お姉ちゃん、ちょっとだけ、聞いて欲しいのだけど」

アリスが人間でないなら、きつと、私の悩みもわかってくれるのだらう。そう思ったから、私は打ち明けることにした。

「何？ 嫌いだから残すっていうのならダメよ」

「違うの。味を、何も感じないの」

「嘘、ついたのね」

私はすぐに謝った。

「ごめんなさい」

はあ、とアリスはため息をついた。

「……味付け、薄かったかしら」

「そういう意味じゃないの。朝は美味しかったのに、なのに」
アリスはまだ、私の悩みを理解してくれなかった。もっと、言葉を尽くさないと。

「私、もしかしたら、血以外の味を感じないかもしれない。もしそうだったら、どうしたらいい？」

アリスは傷ついたような表情をしたあと、ゆっくりと口を開いた。
「……レミリアに、聞いてみたら？　もしかしたら、何かわかるかも」

「アリスは、わからないの？」

「ごめんなさいね、とアリスは言った。

「私、魔法使いで人間とは違う存在だけど、それでも、吸血鬼の体の仕組みとかは知らないわ」

つまり、私はもうアリスの理解の埒外だと。そういうことなのだろうか。

「お姉ちゃん、私不安。私が悪いのはわかってる。でも、不安なの」
「……何とも言えないわ。そもそも、あなたがレミリアのところに行かなければ、こんな目に遭わずに済んだのよ」

アリスの言葉に、私は何も言えなかった。感じるのは失望や、怒り。

「……私、お姉ちゃんを怒らせた」

「そうね」

「……出て行った方が、いい？」

バン、とアリスが机を思い切り叩いた。私は驚いて肩を跳ねさせた。

「……あなたは、あの父親に歪められたのよ」

でも、次にアリスが言ったのはそんな憐れみに満ちた言葉だった。
「違う」

「違うわい。私はあなたが死のうとしたことも、吸血鬼になったことも、こんなことで出て行こうとしたことも全部、あいつのせい。

だから……絶対にあの父親から解放する」

それは強い口調だった。何がなんでも達成するという意気込みを感じるほどの、強力な意志。

「私はお父さんに縛られてなんかいない」

「父親にかけられた僅かな言葉に歡喜して、その言葉を軸に今まで積み上げてきたもの全部捨てようとしてるのよ？ 縛られていなければなんなの？」

「愛」

アリスは首を振った。

「もうあなたの父親はいないの。死んだの！ 父親の影を見て父親を追うのはやめなさい！」

「違う！ 私はお父さんの影なんてみていない！ お父さんは私のせいで死んだんだ！ だから私は！」

アリスの表情はどんどん険しくなっていく。

「どんな事情があつたか知りもしないで、盲目的に父親の言うことを信じて！ あなたはあいつの」

「あいつなんて言わないで！」

「あいつよ！ 父親としての責務を果たせない人間を、父親だなんて呼べるか！」

私はアリスのように机を叩いた。机が真二つに割れ、アリスの作ってくれたスープが二つとも地面にぶちまけられた。

「お父さんは、お父さんだ！ 何があつても、何をしていても！」

私も、アリスも、そんなことに構わず口論を激化させていく。

「違う！ あいつはあなたを切り捨てた！ あなたに死ねと、後を追えと強制した！ あなたは、愛をくれなかった上にそんなことを言う人間を、父と呼ぶの！？」

「当たり前！ 私は四年、お父さんを想い続けたんだ！ 愛してくれるって信じて！ お父さんのために、お父さんと仲良くなるためだけに捧げた四年を、無駄にしたくない！ 無駄にするわけにはいかない！」

私はお父さんに愛してもらうんだ。絶対に。

「あなたは、あいつから返事を聞いたでしょう!? あいつは、全部知って、それでもあなたを拒絶したのよ!？」

「地獄に行けば、お父さんは私に触れてくれる! 抱き締めてはもらえないかもしれない。でも、私のことを見てくれるんだ! それは、私にとっては愛なんだ!」

アリスは、言葉を詰まらせた。

「物心ついてから、私にはお父さんにちゃんと見てもらったことがないの! だから、見てくれるだけでも、十分にありがたいの、嬉しいの! だから、私は!」

アリスは、首を振った。

「あなたのそれは、愛なんかじゃない! 普通の愛をあなた、知らないわけじゃないでしょう!? さっき言ってたじゃない! さっき言ってくれたじゃない、愛してるって! あなたみたいに聡明な子が、虐待と愛情を取り違えるなんて……!」

「……!」

私の頬に涙が流れた。今まで、誰にも話さなかったし、どんな大人にも勘付かれなかったのに。閻魔大王でさえ、私のことを勘違いしたのに。

気付いて、くれた。私は、涙を流して、アリスを見る。

「……お姉ちゃん、私ね」

私は、ゆっくりと話す。私の様子が変わったことに、アリスは気付いてくれた。

「実はね、本当はね、知ってたんだ」

実は、全部知っていた。

ずっと憧れてた。ずっと、羨ましかった。普段は、心の中にさえ浮かべないようになっているけど。それでも、私の本心は、私の本当の心は。

「愛ってね、心地いいものだったね、知ってたんだ」

痛くない、苦しくない、冷たくない、辛くない、嫌じゃない。それが、愛情。そんなのは、知っていた。本に、私の知っている愛は

なくて。だからいつしか、私がおかしいということに気付いた。気付いていたのだ。

「じゃあ、なんで？　なんで、そんなに頑なにお父さんに従うの？　愛を知らない振りまでして」

「だってね、お姉ちゃん。私ね、諦めたくなかったんだ。お父さんから愛情が欲しかったのは、ホント。それだけは、嘘じゃない。でもね、『普通の』愛情が欲しかったんだ」

でも、ダメだった。

『自分のせいで娘が歪んだ』と思えば反省して愛してくれる。それが、私が賭けた、最後の望みだった。ほんと、私はダメな子だ。親をだますようなことを考えて。

「そのために、必死で頑張ったんだよ。この動かない表情と他の子より言葉を思いつくこの頭を精一杯使って、お父さんに普通に愛してくれるよう頑張ったんだ」

けれど私の頑張りには、無駄だった。初めから、成功することのな可能性に私は四年を費やした。

「……それだけ？　それだけで、本当に死のうとしたの？　私じゃダメなの？　私は、普通の愛情をあなたにあげれるよ。それでも、私じゃダメ？」

私は首を振った。違う。アリスが悪いんじゃない。

「お父さんから愛してもらわなきゃ、世間一般の『普通の愛情』じゃないんだよ。お父さんがいて、お母さんがいて。どっちか片方だけだったにしても、最大限の愛をもらえて。それが、普通なんだ。父親にも母親にも愛されたことがないなんて、普通じゃない、異常だよ。それに！」

私はアリスの方を見た。アリスは悲しそうに顔を歪めて、今にも泣き出しそうだった。

「それに、お父さんからの愛が欲しいって、そんなに変な願いかな……？」

高望み、だったのだろうな。だから、全部失敗したんだ。ああ、

そうか。

「そうか、そもそも私に普通の愛なんて」

「漣！」

ぎゅっと、抱き締められた。ふわりと柔らかいアリスの服と、服越しに伝わるアリスの体温。

「あなたに普通の愛はもう手に入らないかもしれない。でも、私が代わりに、いや、普通以上の愛情をあげる。だから、だから！」

会って、まだ二日なのに。それなのに、どうしてアリスは私の事をこんなにも、こんなにも……。

愛してくれるのだろう。

「……お姉ちゃん」

「もう、愛が手に入らないなんて悲しいこと言わないで。もう、お父さんからの全てが愛だなんて苦しいこと言わないで。ここが、あなたの家だから。ここが、あなたの安心できる場所で、私が、あなたに愛をあげる。だから」

だから、なんだろう。

「だから、あなたも私を愛して。もういなくなったお父さんと同じくらい、私のことを愛して」

ああ、本当に、私は何をしているのだろう。こんなにも。

「……ありがとう、お姉ちゃん……！」

それから先は、言葉に出なかった。数年かぶりに私は幼子のように泣いて、泣いて、泣き通した。アリスを力強く抱き締めて。今までの寂しさを打ち消すかのように。大声で泣いて、再び産まれるかのように。

「……漣、愛してる」

私は、バカだ。

大事なものは、すぐそばにあったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256y/>

東方幻想入り

2011年12月13日10時55分発行